



東海発  
331号

# 60代は女ざかり

60歳代は女盛り

青木 みか

向老学への招待

柳澤つや子

「私の高齡期」

門 玲子

60代に ようやく花が咲いた私

浅野美和子

70代だって 捨てたものじゃない

山下智恵子

続・ブラジルの女性は いま

藤井 里子

管理栄養士が家にやってくる！

江川 美晴

詩 「一億総懺悔」の国に生きて

堀場 清子



1枚の写真 —隠されていた放射能の恐ろしさ

小田美智子



## 331号 60代は女ざかり

### 目次

巻頭言 ひと足、ひと足、歩み続けて	齋藤 千代	1
向老学への招待	柳澤つや子	2
六〇歳代は女盛り	青木 みか	14
「私の高齢期」	門 玲子	24
六〇代にようやく花が咲いた私	浅野美和子	43
七〇代だつて捨てたものじゃない	山下智恵子	52
続・ブラジルの女性は、いま	藤井 里子	54
管理栄養士が 家にやってくる！	江川 美晴	64
詩 「一億総懺悔」の国に生きて	堀場 清子	68
証言 一枚の写真 —— 隠されていた放射能の恐ろしさ	小田美智子	74
あぶらのあじび		95

# ひと足、ひと足、歩み続けて

斎藤 千代

六〇代。——若い日には遙かな年齢に思われたが、振り返ると、その一歩一歩は、昨日のことのように思い出す。

それにしても、なんと気長に、一歩一歩を重ねて来たのだろう。徒やおろそかにはできないその歩みは、後退も重ねての六〇年。

古来、「還暦」と呼ばれてきたように、六〇は、人生の一つの節に違いない。右に行こうか、左かと、迷ったことも何度もあった。

今となれば、その迷いもおしく、

小さな一歩一歩を ほめてあげたくもなる。

たくさんの女たちが集い、一九七二年二月、『あごろ』創刊号は産声うぶごえをあげた。

女から女たちへ、誌面からあふれるエネルギーな躍動感、

多くの女たちが一歩を踏み出す、よすがとなった。

一冊一冊、女たちの手でつむがれながら『あごろ』は331号となる。

ひと足、ひと足。女の六〇年は、男の六〇年よりも、重い。

その重さを重ねて、いま、男女平等は、当然になった。

平均寿命が、女は八六歳、男は七九歳と、世界のトップをゆく長寿国ニッポン。六〇歳は、女ざかり。そして男ざかり。

ご自分自身を寿いでほしいと、この号をお届けする。

# 向老学への招待

柳澤 つや子

向老学という名前（あごら261号「私らしく生きるためにそれぞれの向老学」、298号「さわやかに老いる」で紹介）を、初めて聞くという方もおられるかもしれない。もう一度紹介をさせていただく。向老学は一九九九年十月に名古屋で「日本向老学学会」を設立した理事の高橋ますみ氏（名古屋市在住、元NPO法人ウイン女性企画代表、あごらメイト）による造語である。向老学は民間学である。

では向老学とは、どのような学問であるのか。

当たり前のことであるが、人は生まれると同時に、老いと死に向かつて生きてゆく。「向老学は、自分自身を主体として、つまり自己の経験によってどのようにに生き、老いてゆくかのプロセスを研究する学問である。その経験は老いに立ち向かうというのではなく、むしろ老いを迎えることである。したがって、老年学と向老学では違いがある。」（注1）

老年学においては「年寄りが問題だ」という老人問題、すなわち「高齢者を学問の客体として研究する」のに対して、向老学は先に述べたように「私（主語）が経験する、私が老いるプロセスの問題」——自分が老いてゆく経験を主体として研究する学問である。客体と主体の違いである。高橋ますみ氏が「向老学」を考えついたのは、十五年間の姑の介護経験からだという。

「こんなに長生きをするとは思ってもみなかった、自分の老後を考えたこともなかった」とは、姑の言葉であつた。三〇代後半の高橋氏は、姑が自らの老後について何も考えてこなかったことに気づいた。当時（一九七〇年代半ば）は、老いることの意味や老後のことを考えるなど、あまりしなかったのかもしれない。「死後は子どもが何とかしてくれる」が常識であつた。むしろ、「年寄りには役に立たない、価値がない、汚い」など、老いることを嫌ったり拒否することが先行していたのではないだろうか。

有吉佐和子著『恍惚の人』がベストセラーになって数年が経過した時期でもあるが、多くの読者は「老いたら呆ける」ことへの恐怖感を抱き、老いを拒否する傾向になっていた。著者の狙いは、日本が高齢化社会になっていくことや、痴呆症の人が多くなる状況を見越し、介護の重大性を予測したのである。介護の小説そのものが希少であつた時代でもあつた。後になって著者の課題が的確であることを、多くの読者は認識した。

そこで高橋氏は、「自分の老後は自分で決める。誰にも邪魔されないで、私の経験で私の老後を決める」と提唱した。ここに「向老学」の言語が生まれたと言う。そして、向老学を思いついてからおよそ四半世紀後、老いのプロセスを研究する学問として、「日本向老学学会」を設立した。研究者らによつて作られた学会と違い、向老学は民間学であるから、学歴、職業、年齢、国籍などを問わない、誰もが会員になれる学会とした。

向老学の設立趣意書には「生きることそのものを老いに向かうプロセス」としてとらえ、研究・実践対象とする。さらに「人間がその誕生から死に至るまでのあらゆる段階において、個々

人の尊厳を保ちつつ、かつ主体的に生きることを可能としうる社会の構築を、その究極的な目標として位置づけるとしている。すなわち向老学の対象は、人間が人間として生活し、老いてゆく日常性そのものであると考えることができる」とある。上野千鶴子さん（社会学者、東京大学名誉教授）は、この趣旨に賛同されたおひとりで、日本向老学会設立当時から今日まで、さまざまな御支援をいただいている。著書『老いる準備』では「向老学の時代へ」を、『学士会会報2009-1』では「向老学のすすめ」を記している。毎年一回開催の学術総会においても多大なご協力をいただいている。

会長は、設立時の一九九九年～二〇〇六年まで、哲学者、三重大学名誉教授武村泰男氏。二〇〇七年～現在までは、弁護士、元参議院議員大脇雅子氏である。

二〇〇〇年から今年二〇一一年まで、十二回の日本向老学会学術総会は、以下のとおりである。

- |         |               |                       |
|---------|---------------|-----------------------|
| 第一回学術総会 | 二〇〇〇年七月三〇日（日） | 於 ウィルあいち              |
| 基調講演    | 「老いるという経験」    | 上野千鶴子（東京大学教授）         |
| 第二回学術総会 | 二〇〇一年七月二九日（日） | 於 ウィルあいち              |
| 基調講演    | 「老いの近代」       | 天野正子お茶の水女子大学教授        |
| 第三回学術総会 | 二〇〇二年七月二八日（日） | 於 ウィルあいち              |
| 基調講演    | 「老いの原体験」      | 樋口恵子（高齢社会をよくする女性の会代表） |

第四回學術總會

基調講演

二〇〇三年七月二七日 (日)

於 ウィルあいち

第五回學術總會

基調講演

「学問は最高の道楽」 米本昌平 (科学技術文明研究所所長)

二〇〇四年七月二五日 (日)

於 つながれつとなごや

「老いをより輝いて、未病治いきいき健康法」

第六回學術總會

基調講演

二〇〇五年七月三一日 (日)

於 名城大学

中井さち子 (鍼灸博士、現九州看護福祉大学教授)

第七回學術總會

基調講演

二〇〇六年七月三〇日 (日)

於 名城大学

「地域で認知症を支える——改正介護保険と認知症」

遠藤英俊 (国立長寿医療研究センター内科総合診療部長)

第八回學術總會

基調講演

二〇〇七年七月二九日 (日)

於 名城大学

「生と死を考える——ネパールの経験から」

川原啓美 (愛知国際病院院長)

第九回學術總會

基調講演

二〇〇八年七月二七日 (日)

於 名城大学

「おひとりさまで老いる」 上野千鶴子 (東京大学教授)

第十回學術總會

基調講演

二〇〇九年七月二六日 (日)

於 ウィルあいち

「当事者研究としての向老学のすすめ」

上野千鶴子（東京大学教授）

第十一回学術総会 二〇一〇年七月二五日（日） 於 名城大学

基調講演 「自分で選びとる自分の生き方・死に方」

中澤明子（特別養護老人ホーム「せんねん村」村長）

第十二回学術総会 二〇一一年七月二四日（日） 於 名城大学

基調講演 「在宅での看取り／おくりびとの医師」

小笠原文雄（小笠原内科院長）

第十三回学術総会 二〇一二年五月二七日（日） 於 名城大学

テーマ、講師等は未定（猛暑の中の学会であったため、二〇一二年から五月開催とする）

以上のように、十二年間、学術総会を開催してきたが、向老学が民間学ということもあつてか、広く多くの人に知れ渡つては、いない。その大きな理由は、「向老学会としての運動体が弱い」ことであろう。情報発信や収集も不十分であること。毎年学会誌『研考』を発行しているが、内容は学会の報告がほとんどで、会員の当事者研究はわずかであること。また、毎月開催している学会の自主グループ（向老学サロン）でも、会員自らが経験する老いについての勉強会は未熟で、学会誌やニュースレターに発表するまでには至っていないこと。また、同じような趣旨の会や研究会ができたことなど。（しかしこれはむしろ、喜ばしいことであるが。）



これらの事情や会員の高齢化などにより、退会した方や死亡した方もあつて、会員は減少している。

ここ数年の間に、自ら経験している「老いること」について見解を著わす人が増えてきた。上野千鶴子著『おひとりさまの老後』や『老いの・・・』という本など。

周知のことであるが、日本は、二〇〇七年に高齢化率二一％の超高齢社会に至つた。必然的に、老いについての不安やその解消、老いを受け入れて克服する方法や、老いを楽しむことなど、つまり老いてみて分かることを語るようになった。心身の老化防止にとどまらず、居場所や終の棲家の選び方、病氣になった時の事前指定書や、エンディングノート、さらに遺言の書き方、財産管理と成年後見人制度の利用や葬儀、墓のことなどなど。自分で自分の生き方・死に方を選んで決めることが可能になりつつある。

何といつても二〇〇〇年の介護保険制度の導入は、大きい意味を持つ。介護する側の強い要求から生まれた介護保険は、介護される側の要望とはかけ離れたところはある。介護の社会化を担っている。介護する側だけでなく、介護される側においても、自己の経験を語り、よりよい介護のあり方、本当の介護を求めるようになってきた。

認知症は年々増加をしており、現在約二五二万人いると言われ、その中の六五歳未満の認知症を若年認知症と言ひ、約三万八千人いる。

認知症への予防対策の啓蒙活動は、繰り返し広く行なわれるようになった。新薬も開発されて、従来の「初期」だけではなく、「中期」にも効果があると言われるが、回復はまだ望めな

いようだ。また、認知症の人の買い物や徘徊などをサポートする、見守り隊のまちづくりをしている地域もある。認知症の場合も介護をしている家族や施設の職員らの声だけでなく、認知症の人自らが、自己を語るようになった。これは、とても勇気のいることだと思う。

私の周りにも認知症の人が数人いるが、自ら「認知症である」と言える人は、いない。

顔の表情の変化や物忘れが多くなったり、大事な約束をすっばかしたり、人のせいにすることなど、「おかしい」「変だ」と思っても、「あなたは認知症では」とは、こちらからは、決して言えない。

また、「さびしい」「鬱になったみたい」とか、「頭の中に白い雲がかかっている」と話されても、「それは、もしかして認知症の症状では」とは、とても言えない。また本人は、「呆けたふりをしているのだ」と強く主張する場合もある。家族の方も認めることができない場合もある。早期発見早期治療によって、進行を遅らせることはできるのだが、以上のような理由で遅れることもある。「認知症は病気である。誰もが罹る可能性のある病気だ」と理解をしていますが、治らないとなれば、偏見や差別が生まれてくる。

私は六八歳になった。高齢期の真っ只中にいる。そしていつ認知症になっても不思議ではない年代だ。二〇〇五年から学会事務局の手伝いをさせてもらっているが、「向老学と出会って本当によかった」と思っている。もし私が認知症になったら、勇気を奮って、友人、知人、仲間の人たちに、笑顔で言おうと思う。「認知症なの。助けてね、お願いね」と。

でも実際に、そのとき言えるかどうか、それは疑問であるが、それが病氣というものだ。

よく、「認知症になっても心は生きている」と言われるが、そう思うことがたびたびある。

いっしょに勉強会をしていて、同じことを何度も言ったり、聞いたりする人がいるが、嬉しい時は満面の笑みで、悲しい時は気の毒そうな表情で、優しく思いやる。「いやなことはいやだ」と、はつきり言える。感情は、とても豊かである。

もちろん認知症になっても、「認知症になったから」と、その人の人格は否定されるものではない。だが、今までの親しいお付き合いが対等でなくなったり、さらには去っていく人もいる。当事者でなければわからない、心の葛藤があるのも確かであろう。

私は、ささやかだけれど向老学の勉強をしてきた。その中で、「認知症の人は自己の経験において心のうちを話してほしい」と思っている。そうすれば〈不治の病〉と悲観的にならず、誰もが罹りうる病氣であることから、偏見や差別を払拭することができる。このことこそ向老学の趣旨である前述の、「あらゆるライフプロセスにおいて個々人の尊厳を保ちつつ、かつ主体的に生きることを可能とする社会の構築を目的とすること」そのものであるう。

老いて初めて経験することがらを著わしている人たち、ニーズの充実を求める介護されている人たちの訴えを参考にして、「私自身の老後をどう生きるか」を勉強したい。究極には「生まれてきてよかった、生きてきてよかった、いい人生だった」と思えること、言えること、——それが目標である。

向老学および日本向老学会を、もっともつと広めたい。それには運動体を、確かなものになければならない。

①そのひとつ。情報発信のホームページは、充実しつつある。

②次に他の学会や研究会、施設の職員などと連携して、老いの、老後の研究を深め合う。

③向老学サロンは自己の経験を発表しあい、そこからの問題や課題を丁寧にもといていく勉強の場とする。当事者研究の場とする。会員の参加をお願いしたい。

④向老学サロンで勉強したことを、学会誌やニュースレター、ホームページに掲載する。

※向老学サロンの有志から、「向老学会一〇周年を記念して、今まで勉強して来たことを本にしよう」という意見が出た。二〇一〇年五月に、二五人の有志によって「幸齢な生き方 老いかた」(風媒社)を出版した。まえがきを上野千鶴子さんが書いてくださった。

## 向老学会への大きな展望 運動体として

(1) 自己の経験を語る発信地とする。

(2) 認知症の人が本音で話せる場所にする。

(3) やむを得ず寝たつきりになった場合でも、社会とのつながりを持つ、持てるような文化の創造。

(4) 女性学も民間学である。当初は大学などにおいて講義はされなかった。しかし女性学を研究する人たちの努力によつて、今日では多くの大学で講義されるようになった。向老学も、近い将来、大学などで講義をされることを希望する。向老学の対象は、前述の「人間がその誕生から死に至るまでのあらゆる段階」であるから、学生さんも、「老いていくこと」を自身の問題として、ぜひ向老学の勉強をしていただきたい。

(5) 向老学は「老いに立ち向かうこと」ではない、「老いを受け入れること」である。したがって、病気の有無、障害の有無に関係なく、主体的に生きることが目指す。生きていくことが尊いのである。

私は六〇代になって同窓会に出席するたびに思うことがある。出席者のおおかたは、定年を迎えた男性たちで、テニスやゴルフ、野球、登山、旅行、市民運動、ボランティア活動などをして、「老いを楽しんでいる」と言う。しかしそのように言えるのは元気でいられる間だけのようだ。近況報告に「病後のため、家でのおんびりしております」と、毎年同じようなこと書いている人たちからは、「老いを楽しんでいる」という言葉はない。外へ出て元気に何かをしなければ、老いは楽しめないのだろうか。私はそうは思えない。

死ぬまで元気でいられる人は稀れで、現状は平均八か月余患つて死にいたる。「老いること」は「衰えること」であるから、人の手を借りて外出することもできるし、家の中でも社会と繋がりを持ち「生きがいや、楽しみ」を持つことができる。

また、私は、大学時代の女子だけ八人のクラス会を、十数年前から毎年開いている。癌や骨折をした人、親や夫の介護をする人など、年々条件は難しいが、ショートステイを利用したり、ヘルパーさんに支えてもらって出席する友人もいる。クラス会の共通項は、

① 元氣も、衰えも、受け入れる

② 遠慮なく「助けて」と言う

③ 脱日常

④ 当事者の問題を話し合う

である。男性に比べ女性の方が「老いを楽しむ」選択肢が多いようだ。嬉しいことに友情は半世紀続いている。

向老学サロンで同窓会のことを例にとり、「〈老いを楽しむ〉のは元氣でいられるときだけなのか」を話し合った。発言の中の多くは、まずは脱日常で、「病氣や障害があっても、できる範囲で出かけたい」だった。「たとえば車椅子になってもヘルパーさんと同伴で……。」次は、「一緒にランチやお茶をする、支えてくれる友人を何人かつくること」「とても難しいことかもしれないが、日ごろから友だち同士、いつも氣持ちを通じ合っていれば大丈夫」という意見が出た。そして「ひとりで楽しむことも大切である」と。

私の場合、女性の平均寿命約八八歳まで、二〇年ある。

「もう」二〇年しかないと思うのか、「まだ」二〇年あると思うのか。「もう」と思う人と「まだ」

と思う人の意見の違いはどうか。また、誰に介護をしてもらいたいのか、最期を迎える場所（病院死八〇％、在宅死十四％、施設死六％）はどこにするのか。余命がわかった時、まずどんなことを考えるか、延命治療を希望か否か、伝えたい人への言葉、会いたい人、行きたいところなどなど。日常的なテーマをサロンで再び話し合ってみようと思う。老い支度を考えながら、重ねて「いい人生だった」と思えるように、言えるように向老学の勉強を深めていきたい。

「六〇歳代は一番勉強のできる時期なのよ、時間資源、経済資源があつて、体力資源も、まあまああつてね」と、内山章子（恩師故内山尚三先生の奥さま・社会学者、故鶴見和子さんの妹）さんと門 玲子（近世女性史研究家）さんから、ご自分の経験を通していつも励ましていただいている。感謝の念でいっぱいである。自分の老い方、死に方を自分で選んで決める勉強を続けたい。私の六〇歳代は、あともう二年しかない。まだまだずっと続けなければと思っている。

（注１）上野千鶴子著『老いる準備』

（日本向老学会会員・名古屋市在住）

日本向老学会の事務局

〒458・0002 名古屋市緑区桃山4・604 柳澤方

T/F 052・876・6962

<http://kourougaku.web.fc2.com/>

# 六〇歳代は女盛り

青木 みか

私は六五歳になったとき、永年勤務していた女子大を定年で退職した。平成元年（一九八九  
年）であった。

勤務中は病態栄養学を担当していたため、研究と称して、ネズミの飼育実験をし、飼料と血圧  
や動脈硬化の関係を調査していた。ゼミ生の明るい笑顔に励まされたが、私の本心ははずまな  
かった。敗戦直後、就職難の時代、生活のため、やむなく選択した分野であったが、私は自然  
科学系の仕事は苦手である。

定年で職務から解放されたとき「高々と双<sup>もう</sup>手伸<sup>の</sup>ばしぬ弥生空」と口ずさみながら、大空に向  
かって思わず「ありがとう」と叫んだ。

「女盛り」を一応他人に束縛されず自身の思うままに生きぬくことと考えれば私の女盛り、  
否「老い盛り」は六五歳から始まる。

初期八年間は母の介護に明け暮れ、その後は平和運動に協力しながら本年（二〇一一年）米寿  
を迎えた。自由に生活した二〇余年の歩みを省みよう。

## 一、母の介護に八年間 —— 手抜き介護のすすめ



母は満百歳で他界したが、晩年の八か年は、ほとんど寝たきり状態となった。母子二人だけのマンション暮らし。介護保険制度導入の二年前であつたが、終始在宅のまま、互いに協力しあつて平穩に暮らすことができた。百歳万歳と祝福したい思いであるが、介護のコツとして、私なりに次の二点をあげたい。

第一は、トイレ付きベッドを使用し、いっさい下の世話から解放されたこと。

第二は、足が不自由でも、その他は正常に機能したため、人間としての希望をもつて生活できたことである。

### 寝たきり上手、自立排泄の実施

母は、伊勢の山村で長男夫妻と同居し、九〇歳を過ぎても家業の椎茸栽培を手伝っていた。茸をL・M・Sに分類し、百十グラムずつ小袋に詰める仕事を手早くこなしていた。

ときどき帰省する私に、

「仕事は午前・午後、二時間ずつ、と決めているの。それ以上すると、疲れるわ。寝こむと、周囲の人に迷惑をかけるからダメ」

と、彼女なりの日課をたてていた。しかし九二歳の年の暮れ、風邪気味で静養した。

「今日も粉雪がちらついているわ。風邪が悪化するといけないから、暖くしておやすみになつては？」

という嫂の言葉に甘えて布団にくるまっていたら、数日で足の筋力が低下して、起てなくなつてしまった。私は今のうちにリハビリを施せば再起できると思い、当地での同居をすすめた。「老木は移さず」という兄たちの反対を押し切り、住み慣れた郷里を後にして名古屋の我が家に来た。

私は当時、三〇余年間勤務した職場を六五歳の定年で退職し、心身とも多少のゆとりがあり、老・老介護のプランを立てた。まず週一回理学療法士（PT）を迎えて、ベッドの手すりを支えにして立つ練習から始めた。二か月ほど経過し徐々に回復してきたが、高齢者の扱いに慣れていなかったPTは、母がどうにか立ち上がったとき、後方から支えていた手を突然離してしまった。とたんに母は転倒し、大腿骨の骨折。一九九〇年の大晦日に急きょ入院、ギブスで足を固定したまま三か月の絶対安静となった。「今回の事故は、全く私やPTの責任で申し訳ない」と言う私に、母は「何事も他人というものはこちらの思い通りにしないでああ」と、平然としている。

三か月経過したとき、主治医は、「骨折はほぼ治癒しました。明日退院してもよろしい」と言う。

私はギブスを外し、もやしのように白く、活力のない母の痛々しい足を見て、「先生、このまま自宅に戻っても、私には体位交換をする体力ありません。せめて車椅子の利用ができるようになるまでリハビリをお願いします」と、お願いした。

「若い患者は職場復帰への希望からリハビリに専念しますが、高齢者には、その気力がありません。このまま寝たきりの生活を送るよりしかたないのです」

と繰り返される。

私は、

「年寄りだからこそ車椅子の散策もさせたいのです。四季の風情。雲や風の流れを見、小鳥の囀りを聞かせ、路傍の花を見せたいのです」

と懇願した。長い問答の末、やっとリハビリの許可が下り、一か月後、桜散る道を車椅子で帰宅することができた。

しかし、体の機能は完全でない。一日数回に及ぶトイレ誘導やポータブルトイレへの介添えは私には無理。一方、母は「オムツだけは御免」と言う。試行錯誤の末、私はトイレ付きベッドを購入した。業者は「若い障がい者は使いこなしますが、お年寄りには無理でしょう」と言ったが、母は二三日の練習後、巧く操作できるようになった。ベッドの中央に蓋付の穴があり、その下に便槽と水槽がある。ボタン操作ですべて作動できる。私はこの便利なベッドに、五つの利点を認めた。

①排泄は一人で行えるため、プライバシーが保持できる。②毎日数回、脳を働かせ、全身を動かすため、認知症の予防にもなる。③床ずれや手足硬直の心配も不要。④経済的であり、衛生上もよい。紙オムツや布オムツより手軽に使用でき、ゴミとして焼却する必要もなく、エコ問題も解決。⑤介護者は一日一回便槽を清掃するだけでよく、外出も自由となる。

## 生命ある限り希望あり 社会参加の喜び

明治生まれ。勤勉を美德として生きてきた母は、「無為徒食で申し訳ない」と言うのが口癖となつた。人間には何か生き甲斐が必要であり、家族の絆も必要である。母は五人の男子と私を育て上げた。遠方にいる子どもたちとの文通をすすめた。「百歳近い母上の直筆を拝して……」という喜びの手紙を顔を綻<sup>はな</sup>ばせながら繰り返して読んでいる。隣家の幼児は、折り紙の鶴や風船を持参して下さるので会話も楽しむ。

一方、常に相手の立場を思いやる母は、「子どもたちも、医師や海外出張の多い職業で忙しいのに……」と、自分の存在が彼らに負担をかけていることを懸念している。

私は、寝たきりでもできるボランティア活動を思いついた。

NGO(非政府組織)の青年海外協力隊にカンパすると、「クロスロード」の機関誌が届けられる。開発途上国で技術指導にあたる若者たちの活気に満ちたカラー写真を見ながら、「今の私たちは、ほんとに立派やなあ、無報酬で遠い僻地に向いて働くなんて」と、母は感歎する。

またフォスター・プラン協会に加盟すると、国際里親となる。タイの少女や中国山村の男児との交流が始まる。絵手紙が届くと、母も「九十の手習い」と、笑いながら上半身を起こして日本の風景や花・野菜などを描いて送る。

ボランティアは額の多少にかかわらず大きな喜びで報われる。老・老世帯の体力不足をメンタル面で補うよう留意した。

「寝たきりにはなりたくない」という先入観を捨て、人間の価値を生産能力や経済力で評価することから脱皮したい。『寝たきり生活』をクリエイティブな文化にすることの意義を痛感する。私は介護の要領を公表したく『老いが老いを看とるとき』のタイトルでミネルヴァ書房から拙著を出版（一九九六年）した。本は五千部くらい捌けたのみで、トイレ付きベッドは普及しない。今なお介護には体力を要し、3Kの仕事として一般に敬遠されがちである。とくに老老介護が永年継続すると、悲劇を産む場合がある。

人間として生まれた限り、晩年の歳月が寝たきりになろうとも、最後まで、人格と自負心をもって「私の人生は幸せだった」と、感謝して生を閉じるようにしたい。人間という生物にはその可能性が賦与されている。私は母の介護を通じて多くのことを学ぶことができた。

## 二、私なりの平和運動

「……淋しい独り者の老人は、身边に腹立つ材料がなくなつて、だんだんと天下国家を論じ、立腹する。」

日本の女老人が天下国家を憂えても、天下国家は何も変わらない。天下国家は不気味になるばかりである。……」

これは、作家・佐野洋子さんのエッセイ『役にたたない日々』（朝日新聞出版、二〇〇八年）の一部である。全く同感である。しかし、夫は戦死し、原爆で被災した兄と弟をもつ八八歳の

私は、戦後六七年間、日々、戦争こりこりの執念を抱いて生きている。今日、世相に危機を覚える時、「今こそ、憲法第九条」と叫ばずにいられない。

二〇〇五年〈あいち女性九条の会〉が発足したとき、発起人となった。孤独な反戦の声も、結束すればパワーは強化される。

### (一) 改憲派の主張に対する私の疑問

「独立国である以上、ふつうの国として武装して自衛するのが当然だ」という主張がある。

例えば中国は、世界一、約一五〇万人の兵力を誇るが、もしこのような国の脅威に対して武力をもって対峙すれば、競争はエスカレートするばかり。核兵器の時代、両国民の滅亡をも招きかねない。

第二に、「今日の不況は、軍需産業の活性化で打破できる」という主張である。二〇一〇年末の失業者は約三三〇万人、有効求人倍率〇・五八となっている。厚労省の発表では、非正規社員は三割を占め、ニートやホームレスは増加し、四〇〇万人を超えているという。第一次、第二次世界大戦も、不況が一因となった。しかし、不況を戦争で解決するというのは、短絡的で危険な主張である。過疎化、高齢化で人手不足の農山村や、日々需要の増す介護福祉施設などの充実に、余力が活用されることを望みたい。

第三は、若人の姿勢。草食型といわれる素直な人たちは、体制に順応する。六〇年安保の時

代は、戦後十五年。戦禍の残像は国民の脳裡に残り「安保に調印すれば戦塵に巻き込まれる」との懸想から、学生たちは安保反対の闘争に立ち上がった。全国で四千万人が署名したが、当時の岸首相は安保条約を承認した後、辞任した。今日の沖縄の基地問題に安保第六条が関連していることは当然である。条約は、交渉によって改定され得ると思うが、政界にも、一般国民にも、改訂要望の声は聞かれない。〈九条の会〉の一員として、私自身も反省する。

外交努力より防衛力を重視する今日の風潮、「国際貢献のため改憲して武装する」という主張に、私は矛盾と危惧を抱かざるを得ない。

## （二）守りたい、広めたい、平和憲法

最近とくに、「終戦当時、米国から押しつけられた憲法は、六〇余年経過し、内容も古くなった。この辺で今の時代に適合した憲法を作らなきゃ」という声を聞く。国会議員の中でも「押しつけ憲法」と主張する人が多い。

しかし、憲法成立の過程を調べ、加藤周一著『憲法は押しつけられたか』（岩波ブックレット、二〇〇五年）その他の書物を読了すれば、今の世論は誤解であることが確認される。また最高司令官ダグラス・マッカーサーの書いた回想録（津島一夫訳、朝日新聞社、一九六四年）にも、「戦争放棄の発案者は日本の幣原」と明記している。民主主義の歴史をもつアメリカやヨーロッパの憲法の中から良い部分を抜粋し、理想的なものを作り上げたという。この〈世界の宝と

なっている平和憲法」こそ、私どもは守りぬき、広めたい。

「戦争の放棄」は、憲法第二章第九条に明記され、〈九条の会〉は、二〇〇四年六月十日、井上ひさし、大江健三郎、梅原猛、澤地久枝など、九名の有識者で結成された。現在、〈九条の会〉は、日本全国で七、五〇〇に達している。

私自身は〈あいち女性九条の会〉と、〈みずほ九条の会〉に所属している。街頭における宣伝活動、平和行進、成人式における新成人への呼びかけをはじめ、反戦映画の映写会や講演会を開催し、運営資金を得るための護憲バザーなど、会員は和氣藹々と活動している。

高齢の私は、若い会員たちと行動を共にすることはできないが、次のような拙著を出版して、反戦の思いを訴え続けている。

『どうして戦争をはじめたの —— 「ノー」と言えなかった狂乱の時代』(二〇〇二年)

『危い！戦争がつくられる』(二〇〇六年)

『がんを抱いて〈九条の会〉』(二〇〇九年)

『平和をつむぐ —— 平和憲法を守る九人の手記』(二〇一一年)

『平和をつむぐ』は、東日本大震災後、半年余経過した今秋出版したが、東京電力福島第一原子力発電所の、事故収束の目処は、ついていない。放射性物質の汚染により、住民はじめ農業・漁業・畜産業が多大の被害を受けている。当地の〈戦争資料館、ピースあいち〉を営営する野間美喜子館長は〈九条の会〉のメンバーや有志二六名と「原発に依存しない新しい日本の創造に向けて」のアピールのもと、原発廃止の運動を立ち上げている。私もその一員として、



静岡県知事や福井県知事たちへ「原発の運転再開を認めないで！」のはがきを発信し、脱原発の賛同者を増やす努力をしている。

国を挙げて震災復興に尽力すべきこのとき、一方で憲法改正の機運が進展し、憲法審査会が始動していることに不安を覚える。九条を改めることより、憲法第二五条を国民生活に生かし、文化生活を営む生存権を速やかに実現することが先決ではなからうか。

（九条の会）メンバー・名古屋市在住）



平和をつむぐ 平和憲法を守る9人の手記  
青木みか・森英樹 編 1500円＋税 風媒社  
戦争を学び、かけがえない平和を生きたために



幸福な生きかた 老いかた 向老学実践編  
青木みか・高橋ますみ 編 1500円＋税 風媒社  
幸齢者の学園祭！

# 「私の高齢期」

門 玲子

「六〇代は女ざかり」という題を頂いて、考え込んでしまった。私は女性として生まれたので、女性として死んでいくことに100%決まっている。女ざかりと問われても戸惑ってしまう。人生の最充実期と言い換えよう。

八〇歳になった今、振り返ってみると、私の最充実期は五〇代から七〇代半ばであったと思う。まだ体力気力十分であったし、世間にも怖じることなく対応できた。私の主要な仕事である江戸時代の女流文学に関する著作は、遅い足取りながら着実に進んでいたし、それに伴う人間関係の広がりも稔り多いものになっていた。その上、十年近く続く夫の介護と、九八歳で亡くなる老母の遠距離見舞いが加わった。誰しも経験することだろうが、私の場合もすべてひとまとめにやってきた。どうやって乗り越えたか、今では茫々としているが、夫の食事を介助しながら、台所で立ったまま朝食をとっていた光景が切れ切れに思い出される。

朝、五時に起きて、洗顔歯磨き、髪にしっかりブラシをかけて、頭をはっきりさせる。「これから一時間、二階で仕事だから、その間静かにしててよ」と夫に頼んで、二階の机でパソコンに向かう。何物にも煩わされず、四冊目の著書となるはずの、江戸後期の仙台の女流文人・

只野真葛についての原稿に集中した。一時間余り経つと、何度も読み返し、ヨシツと気合を入れてパソコンを閉じる。ダダツと階段を降りて、台所で夫と二人分の野菜ジュースを作りにかかった。

まだ現役中だった頃、夫は野菜が嫌いで、朝食抜きで出勤する癖だった。せめて野菜ジュースだけでも摂ってもらおうと作り始めたのだが、しばらくして気がついた。「私にも体というものがある―」夫のためだけに作っていたジュースを少し増量して、自分の分も作った。それまで自分の体のことなど考えていなかったのだ。それ以来の長い習慣だった。

夫のジュースは小ジョッキ一杯ほど。それに浅野美和子さんに勧められた玄米酵素を加え、トースト一枚を浸しながら食べる。嚥下障害のある夫がうまく飲み込めているか、ちらちら見ながら、私は台所で立ったまま、同じ朝食を摂った。その習慣は、夫の最後の入院まで続き、ジュース―四台を使い潰した。

朝食の後は服薬。排尿障害のある夫が自己採尿する介助、その後始末。洗濯。昼食の準備。昼食の後に、脱水しやすい夫の水分補給と嚥下訓練を兼ねて、彼がア―と発音している間に、食道に管を挿入して、もぐもぐ飲み込んでもらう。胃に届いたかどうか、管に空気を送りこんで、胃の辺りに聴診器を当て、ボコボコという音を確かめてから、ぬるめの白湯を二〇〇ミリリットル胃に注入。これは「―術」という医療行為だ。その後、夫は昼寝。私は片づけ、掃除、買い物など。夕方マッサージの先生がリハビリに来て下さる。それがすむとホッとして、夕食の準備にかかる。他にもヘルパーさんについてもらって歩行訓練の散歩、プールでの訓練

もあつた。息つく暇もない日々。私はまだまだ体力気力十分の六〇代〜七〇代前半であつた。夫の自己採尿の介助と嚙下訓練の「――術」は、ずいぶん上手にやれるようになった。大病院に長く勤務していた友人は、「あなた、看護助手になれるわよ」と褒めてくれた。七〇近くなつても「就職口が広がる」と聞くと嬉しかった。

振り返つてみると、夫の体調不良は、ずいぶん前から始まっていた。私の三冊目の著作『江戸女流文学の発見』（藤原書店）が思いがけず毎日出版文化賞に選ばれたのが、一九九八年、私の六七歳の秋である。十一月二十日に水道橋のホテルで賞の贈呈式があるという。はじめ「僕は行かない」と言っていた夫が「久しぶりに東京に行く」と言い出して、実家の兄嫁や甥、東京にいる娘と一緒に出席してくれることになった。

夫には前から多発性脳梗塞によるらしい軽い歩行障害と、排尿困難が始まっていた。そのせいで突然粗相して、慌てさせられることがあつた。当日、新幹線から人ごみの東京駅のホームに降りたとたん、「トイレはどこだ」と言い出した。トイレはエスカレーターを降りて改札を出て、さらに広い長い長い階段を降りなければならぬ。私は背中が冷たくなつた。その十日前に広島県の頼山陽史料資料館で頼山陽記念文化賞の授賞式に出席し、後にも会合が重なり、私は自分の上京の準備で精一杯であつた。夫のために失禁防止用の下着を用意することを忘れていた。何とか尿意を我慢してもらつて、ホテルまでタクシーで急いだが、その日はクリントン大統領の訪日の日で、つい先刻、交通規制が解かれたばかりだ、という。車で込み合う道を近くのホ

テルに着くまでに冷汗が流れた。

私が和服に着替える間に、夫は何とか用を足した様子である。私たちはまた急いで会場のホテルに向かい、娘によく頼んだが、式の間中、その心配が去らなかつた。その日は、名古屋の女性史勉強会の友人たち、大府の読書会の友人、東京、金沢の旧友もたくさん出席して下さつて、式後のパーティーは華やか盛り上がった。私もそれに溶け込んで、心配は、いつしか消えていった。今、その日の写真を見ると、夫は、どの場面でもリラックスして談笑していてホツとする。同時に東京駅で「トイレはどこだ」と言つて、ひやりとさせられた感覚がまざまざと蘇る。

そのパーティーの会場で、仙台から出席された渋谷和邦氏と出会つたのは偶然の幸運だった。私は次回作に、江戸後期の仙台で活躍した女流文人・只野真葛の生涯を書くつもりで、数日後に仙台にある真葛の墓を訪ねる予定をしていた。私が受賞のお礼の挨拶の中で、真葛の名前を口にしたのを聞いて、「案内をしよう」と申し出て下さつたのだ。聞けば真葛のご子孫の只野家は、仙台からかなり内陸の中新田町にある。只野家のお隣が渋谷氏の御親戚だということ。

渋谷氏は幼稚園の経営者で忙しいが、時間は自由になるという。そのやり取りを聞いていた周囲の友人たちから、「わあっ」と声が上がつた。私は一瞬ひるんだ。これでもう只野真葛をテーマにして書くという、最も困難な仕事から逃げられないのではないか。真葛は、数ある江戸後期の女流文人の中で、最も大きく多彩で、理解しにくい存在なのだ。数日後にお墓に詣で、図書館で調べて、その後どうするか目途がついていなかった。活字になっている真葛の作品を読み込むという道しかないか、と考えていた。そこへ渋谷氏が案内を買つてでて下さつたのだ。

もしかして只野家御秘蔵の真葛の文書類や遺品など見せてもらえるかも知れない。しかしそれは別の難しい道を選ぶことになる。すでに活字になっっている、他人が解釈した真葛像に頼らず、自分で直接、真葛の手稿、遺品に触れ、その環境を見て自分なりの真葛像を描きださねばならない。それは最も難しく、しかし一番手応えある道なのだ。私はもう後戻りできないと覚悟した。

それにしても『江戸女流文学の発見』の受賞の日に、渋谷氏という得がたい道案内が現れるとは……。真葛がわざわざ忙しい渋谷氏を差し向けてくれたような錯覚さえ覚えた。渋谷氏はその日、同時に受賞された岩田誠氏の招待客として出席されていたのだが、私はひそかに彼を「真葛の使者」と命名した。

渋谷氏からご親戚の中新田町の渋谷先生へ、真葛のご子孫只野家へ、そして真葛の義弟のご子孫木幡家へと、ご縁が次々に広がった。私は活字の上でのみ知っていた只野真葛という江戸後期の女性がたしかに実在し、そのわかりにくい思想を彼女から直に解き明かしてもらうような実感を得たのである。後で知ったのだが、渋谷氏は、古典から現代までの内外の音楽、美術、文学などに実に詳しい正統派の教養人である。だからこそ、いつも私の要望の核心を的確に汲みとり、真葛の作品中の彼女の足跡の感じられる場所へ、確実に案内して下さった。この案内者に導かれて、私の真葛への旅は、多賀城、七ヶ浜、塩釜、松島、荒浜その他へと広がった。（これらの土地は残念ながら、今回の東日本大震災の津波で甚大な被害を受けた。）

一九九九年の五月、只野家の真葛関係の資料を見せていただくことになって、東京の女性史

研究の友人、柴桂子さん、清水貴子さんと三人で仙台へ向かった。仙台の渋谷氏、中新田の渋谷先生のご案内で、まず奥羽山脈の山懐に近い、加美町孫沢の木幡家を訪問した。敷地七千坪という伊達政宗から拝領した土地に、四百年以上住んでおられる。その家の五代当主が、真葛の夫、只野伊賀の弟、木幡四郎右衛門である。彼ともう一人の弟が、江戸から下った真葛に、仙台領内の不思議な昔話や口碑を話して聞かせ、真葛は、それらをもとに「奥州ばなし」その他の作品を書いたのだ。その点で、真葛の文学を考える上でも、重要な人物なのである。「奥州ばなし」中の五つの作品は、芥川龍之介の「椒図志異」の中にも書き写されている。

木幡家で我々は「きりしたん考」と呼ばれている、真葛の主要な作品の稿本を見せて頂き、写真にとった。後、広大な屋敷内と裏山を案内してもらい、仙台藩の所拝領（しやうらいりやう）という知行制の一端を感じ取った。

翌日は中新田の只野家に伺い、真葛の手紙、歌稿、遺品類を初めて拝見し、写真に写させてもらった。素晴らしい筆跡であった。夕刻、渋谷氏の車で仙台に帰り、新寺小路の松音寺にある真葛の墓に詣でた。翌日も渋谷氏の案内で、仙台市の文学館に行く。ここには真葛研究の草分けである中山栄子氏の資料が寄贈されていた。中に真葛の蔵書だったと言われる書籍の写真が二枚あった。それらは江戸後期に刊行された方言辞書だ。私は真葛の諸作品を読んでいると、彼女が歌人として言葉遣いに敏感な人であることをいつも感じていた。写真の書籍が確かに真葛の蔵書であったとすると、彼女が江戸と仙台の言葉の違いに敏感であったことの、一つの証しとなる。これは大きな収穫であった。

木幡家、只野家での資料の数々、それに文学館での貴重な収蔵。仙台で二泊しただけの結果が得られて、私は満足した。さすがに疲れて、「帰宅したら、休んで、ゆっくり資料を検討しよう」と、帰りの新幹線の中で考えた。

夕方遅くに帰宅した私を見て、夫は「どうだった。いい取材ができたかね」と訊ねてくれた。私は一気に貴重な資料をたくさん見せてもらえたこと、写真もいっぱい撮影できたことを報告した。そして「そちらは二日間どうだった」と聞き返した。「うーん、血尿が止まらなくなつてなあ……」と困り果てたように言う。「えっ」と息が止まるように感じて、旅の疲れが吹きとんだ。

翌日、名古屋のかかりつけの病院へ二人で急いだ。泌尿器科で診察と処置を受けて説明を聞くと、夫には尿閉の症状があり、排尿が終わっても、なお膀胱内に六百ミリリットルもの残尿があるのだという。膀胱が延びきったゴム風船のようになって、尿意があつてもうまく排尿できないのだ。時々、突然粗相して驚かされた理由がわかった。そのまま四、五日入院して、カテーテルを使って自己採尿する方法を習った。その後、尿閉の原因とみられる前立腺肥大の手術を受けるために、再度入院した。これは順調に行われ、幸い癌細胞も見つからなかった。二度の入院の間、私は、ほとんど毎日病室へ通ったが、その合間を利用して、仙台の図書館、博物館、塩釜神社の宝物館へも、大急ぎで通った。真葛関係の資料と、真葛の作品に出てくる土地のこと、作品中の人物のことなどを調べた。

仙台から帰りの夜おそく、名古屋駅からタクシーで中区の病院へ行った。遅いので横の通用口からそつと入っていくと、薄暗い待合室で、夫が一人で淋しそうにテレビを見ている。土産



の菓子を渡し、少し話して、また通用口から帰った。後ろ髪を引かれるような思いがした。しかし、夫がその時本当に淋しかったかどうか、それは私の思いすごしで、誰にも邪魔されずに野球を楽しんでいただけかも知れない。それは夫婦といえどもわからない。

そこは夫の勤務する新聞社の病院で、初めて軽い脳梗塞の症状が出た時も、大腸ポリプを八つも拵えて採ってもらった時も、お世話になった。しかし、七〇歳になって、完全に仕事の現場から離れたので、大府市の住まいに近い国立長寿医療センターに転院した。

仕事から完全に解放されると、夫の歩行障害は急激に進行した。男性は仕事から離れるところなのか、と驚くほどの衰え方である。彼はそれまで、氣力をふり絞って仕事をこなしていたのだとわかった。私が付き添って行けない時、一人で病院に行くと、主治医のM先生が「付き添いがないと全く違いますね」と言われるほど弱々しい足どりになり、勧められて二週間のリハビリ入院をした。その後は週一回のリハビリ通院、ヘルパーさんについてもらって散歩、プールでの歩行訓練もした。それでも急に歩けなくなつて道端にしゃがみ込み、近所の人に連れてきてもらったこともある。そしてたびたび緊急入院した。また在宅の時は、月一回のショートステイのサービスを利用した。そんな時、二日間の余裕ができると、私は仙台へ赴き、真葛の作品群に描かれている仙台付近の海岸線の各地を歩き、当時のままの建物や、風景、光、風に触れ、いつも何かしら確実な収穫を得て、夫の介護の待つ自宅に急いで帰った。億劫になったことは一度もなかった。そして現場を歩いて得た実感から、江戸後期女性の最高の知性の一人只野真葛を描くのに、どのような構成、文体で書くのがよいか、それを考えていた。

一方、夫の容態は、良くなったり悪くなったりを繰り返した。運動を好まない性質で、リハビリに積極的ではない。私は夫にやる気を起こさせるために、以前から二人で参加していた「中国歴史文化を学ぶ会」の中国旅行に、久しぶりで参加しよう、と提案した。夫は『三国志』の大ファンなので、故八木毅先生が主宰されていたその旅行にはいつも喜んで参加していた。入退院が続いて、二年間参加できなかったが、二〇〇一年はシルクロード行きなので、期待が高まって、リハビリ訓練に力が入るようになった。主治医のM先生は、「なんとか行けるでしょう」とおっしゃり、同行する友人たちは「行けばなんとかなるわよ」と励ましてくれた。「大丈夫。行つてきなさい」と保証してくれる人は、一人もいなかった。

私は夫の車椅子を押してもらう男性のヘルパーさんの派遣を依頼し、Kさんが来て下さった。Kさんに事前の歩行訓練の散歩にあちこち連れ出してもらい、私たち二人でも、懸命にリハビリに励んだ。夫は緊張の余り、出発前日にふくら脛が固く凝って、歩けなくなってしまったほどだ。けれども出発の当日は、にこやかに手を振ってKさんに車椅子を押してもらい、誰よりも先に飛行機に乗り込んでいった。

敦煌市莫高窟の壁画や鳴沙山の観光は、Kさんの実に適切な介助のお蔭で無事終えることができた。付添いの私はリラックスして、友人と月牙泉の近くの砂に寝そべって、心を広い大空に溶け込ませた。娘は元気な人たちとラクダに乗って楽しんでた。翌日は、敦煌の西にある唐代の遺跡、玉門関の見学である。ゴビ灘たなの高原をバスで越え、目的地で降りると、広い砂漠が続く。その彼方に巨大な粘土の塊のような遺跡が見える。車椅子で移動中の夫がそれを見つ

けると、突然立ち上がり、カメラを片手に杖もつかずに歩きだした。Kさんが急いで杖を持って追いかけて下さった。「おとーさんが歩いているよー」と私が大声で娘に叫んだ。夫はそのまま、現役時代のように背筋を伸ばして、大股で玉門関まで歩いて行った。

広々とした青空の下、遠くに憧れの遺跡を見た夫は、どんなに嬉しかったのだろう。その喜びが体を活性化させ、帰国までを歩き通すことができた。

帰国すると、名古屋空港でのお別れの挨拶で、中国国際旅行社の胡社長が、「元気に歩いて出発して、怪我のため車椅子で帰国する人がありますが、車椅子で出発して歩いて帰国する例は、初めてです……」と発言されて、皆大笑いとなり、拍手が起きた。

帰国して九日目に、私は松阪市で行われた本居宣長に関するシンポジウムにパネリストとして出席した。以前からの依頼で断れなかった。四、五日経つと、私の背中から右肋骨に沿って胸まで、帯状疱疹が発症した。肌着に触れてぴりぴり痛む。私の主治医からは「もう少しで入院だった。中国なんぞにフラフラいくからだ」と叱られ、神経ブロック注射を数回受けた。やはり七〇歳で病人を連れての海外旅行や、シンポジウムは無理だったか、と思った。しかし怯んではいられなかった。

帰国後しばらくして、夫の状態は、また少しずつ悪くなっていった。それに加えて、九〇歳を過ぎていた郷里の母の状態が悪くなった。いつも朝早く起き、お茶の用意、食事の下拵えなどしていたが、その頃からしばしば鍋を焦がすようになり、甥や兄嫁から「台所で火を使うな」と言われるようになった。何年も前から茶飲み友達がぼつぼつと欠けていき、淋しがっていた

母は、少しずつ気分が陰しくなった。気性は激しいが兄嫁とは長年仲良く暮らしていた。しかし母は負けまいとして、兄嫁や、中学生になった曾孫たちと、本気で争うようになった。私は、夫のショートステイを利用して帰郷し、山代、山中など、近郊の温泉に母を連れ出して一泊した。兄嫁は一晚でもホツとする様子だった。十日近く、我が家でも預かったが、母は一向に落ち着かず、自宅に居場所が無くなるのを怖れているように見えた。しかし帰宅させれば、兄嫁が、母と若い者たちの間に立つて疲れ果てている。老母には気の毒であつたが、ここは若い人たちがのびのびと暮らせるようにしようと、私は決心した。

郷里の知り合いの医師に相談し、その病院の経営するグループホームに、ようやく入れてもらえることになった。母は、はじめ環境の激変に戸惑つて、「死ぬ、死ぬ」と口走っていた。

しかし翌月、私が見舞いに行くと、母は私を見るなり自分の部屋へ案内してくれて、「こないだいい部屋に入れてもらっているんや」と言つて、私をびくりさせた。そして同じ階の、同年配の三人と気が合つて、談話室で仲良く話している様子である。係のヘルパーさんに聞くと、「ここの入居者は皆さん、初めの頃はあんな風に落ち着かず、一月もすると落ち着かれます」と、教えてくれた。私は自分の将来像を見るように思ったが、また明治、大正生まれの人たちの、施設に対する強い抵抗感を改めて感じた。それを必死に克服した母に、強い共感を覚えた。

母のことはひとまず安心したが、私は安閑としていられなかった。執筆中の只野真葛に関する原稿はかなり進んでいたの、あやふやな細部を確かめるため、名古屋の図書館や、仙台の図書館、博物館へ大急ぎで通つた。また真葛の最大の著作「ひとりかんがへ」を読んで、痛烈

な批判を加えた曲亭馬琴の墓のある文京区小日向の寺や、千代田区九段北の旧居跡に足を運んだりもした。

一方、夫の介護は、日増しに重度を加えていった。嚥下困難がかなりひどくなり、いつまでも食べ物や口中に詰め込んで嚥んでいる。そんな時、私が一言冗談を言うと、ぷっと噴き出して、ご飯やおかずの混じったものを頭から浴びせられるのは何時ものことであった。採尿の介助はずっと続いていたが、大腸過敏症でもあったので、大きな粗相も度たびであった。私は、いつも、洗面台の下に古新聞、古布、逆性石鹼、漂白剤を常備して手早く処理、洗濯、消毒をしていた。ある時トイレから廊下、ベッドまで汚された時には、大急ぎで駆けつけて下さったヘルパーさんの顔を見るなり、泣いてしまった。それでも下半身をシャワーできれいにあげてさっぱりし、すやすや眠っている夫を見ると怒る気にもならない。

私は夫のショートステイの期間を利用して、玄関、廊下、洗面所のカーペットを全部はがし、掃除しやすい板張りに替えてもらった。ついでに黒ずんでいた壁紙、天井も明るく替え、気分を一新した。

ある時、気持ちよさそうにしている夫に「あなたが粗相して着替えした後、私は掃除、洗濯、消毒で大変なんだけど、どこまでわかってるかな」と聞いてみた。「全く考えたことはない」と、即座にはつきりした答えが返ってきた。私は呆気にとられ、いっそサバサバした、爽快な気分になってしまった。「介護は排泄物との戦い」と言っていた友人の言葉を思い出し、肝に銘じた。

そんな日常も、老母の遠距離見舞いも、あちこちへの取材旅行も、同時進行で続けられたのは、書き続けている原稿があったからだと思う。それが私を支えてくれた。

行方不明の独身の叔母が一人いて、全く縁のない、いわき市で亡くなっていた。富山県高岡市にある菩提寺から知らせて来たのは、一年以上もたってからである。母しか身寄りがないので、母に代わって遺骨を迎えに行き、住まいの後始末、相続の手続きを、娘とともに全部終えた。気分が沈みこむことは、一度もなかった。

夫の病状は、悪いながらも安定していたし、私は、注意深くしていれば、まだまだ在宅での介護が続けられると思っていた。もし何かあるとすれば、それは事故だろうと感じていた。

その事故が思いがけずやって来たのは、二〇〇五年の暮であった。十二月二十七日、その日は忘れない。朝から寒気が厳しく雪がちらついていた。ヘルパーさんが散歩に付いてくれる十二月最後の日で、県の施設へ健康プラザへ行き、少し歩行訓練をして三階の食堂で昼食をとった。そこは眺めが広く、気が晴れるのだ。寒いからどうしようかと迷ったが、その日を逃すとヘルパーさんも施設も年末の休みに入ってしまう。私は気晴らしがしたかった。翌日からは年末に帰省する娘と二人で、年明けの五日まで夫を支えなければならぬ。施設は空調が効いているから大丈夫だろう。私は自分の気持ち優先させてしまった。夫の体調も悪くはなかった。

健康プラザは年末なので空いていた。地下の施設で少し遊び、三階の食堂の端っこ、眺めの良い場所を取って、三人で昼食をとった。夫は食欲旺盛で、「少しずつ食べなさい」と言っ

でも聞かない。口いっぱいにご飯やおかずを詰め込む。飲み込めずに噎せて、こぼす。備え付けの紙ナプキンをいっぱい使つて汚れを拭いながら食事を終えた。その年のリハビリも終わった。帰宅して夕食の時に、夫がどうも変だ、変だと言う。喉に何かひっかかっていると繰り返す。悪いと思つたが、ヘルパーさんにまた来てもらつて、病院へと急いだ。病院も翌二八日で一年最後の日となる。もう時間外であつたが、幸い消化器科の先生が当直で居られて、夫の食道にひっかかっていた部分入歯を、内視鏡で取り出して下さつた。かなり深く食道の壁に食い込んでいて、困難な作業となり、傍で映像を見ながらハラハラした。以前にも入歯を飲み込んだことがある。歯科の先生が、もう飲み込めないようにと大きく作つて下さつた、それをご飯と一緒に、また飲んでしまったのだ。

その夜は、経過観察ということで、一泊入院することになった。「明日早くに着替えを持ってくる」と約束して私は帰宅した。夫はなんとなく不安そうであつた。現役の頃と違って、何と気弱なつたのだらうと一瞬思つた。何故あの時、付添つていてあげなかつたのかと、私は後悔することになる。その夜遅く、夫は内視鏡によるショックから痙攣を惹き起こしてしまつたのだ。私が病院からの電話で駆けつけた時、もう別の部屋で、酸素マスクを着けて眠つていた。「今は一応おさまっている」と聞いたので、その夜は着替えを置いて帰宅した。翌朝急いで病院へ行くと、すでに集中治療室に移され、酸素マスクで話ができないし、夫も自分の身に何が起こつたのか、不安に感じている様子である。M先生が来て病状を説明して下さつた。夫の多発性脳梗塞はもう長いので、脳血管のあちこちに障害があり、痙攣がどんな事態を惹き起

すか、わからない、危険な状態だという。そして「昨日今日でよかった。まだ手が揃っていて……」と言われた。次の日からは年末年始の休みで、看護も手薄になるのだ。

すぐに娘と、福井に居る夫の弟に電話した。二人の弟が都合付けて三〇日に見舞いに駆けつけてくれた。M先生が当直でいらして、詳しい説明を聞くことができた。夫の脳血管障害は、職業上、長年のストレス、大量の喫煙、飲酒、偏食などの不摂生によるもので、何が起きて不思議ではないと、詳しく話して下さって、弟たちは納得した。何度も集中治療室に一人横たわる夫に声をかけ励ましてくれて帰って行つた。その夜の列車は、年末の帰省客で身動きも出来ない込みようだったと、後で聞いた。

夫の痙攣は、予想もしない手強いものであった。一応収まって一般病室に移されても、翌日行くと、個室に移され、酸素吸入、心電図、血圧計その他の計器に囲まれている。痙攣で唇を咬まないようにガーゼを銜え、両手を拘束されていることがしばしばあった。種々の薬剤が試されたが、なかなか効果がなかった。一時的に快方に向かつて、また個室に戻され、脳神経外科の先生方も加わつての治療となつた。

夫の入院前に書き上げて、出版社に送つてあつた私の原稿は、三月半ばにようやく出版された。『わが真実物語』というタイトルで、私の着物の柄を表紙に使つて、実に読みやすく編集された美しい本になっていた。翌朝、私は急いで本を持って病院へ向かつた。その時夫は小康状態で、四人部屋に戻つてベッドに起き上がつていた。私が届いたばかりの本を手渡すと、夫はまだ震えの止まらない両手で、しっかり持つて「出来たか。出来たか」と喜んでくれた。



指が震えて頁をめくれないので、目次や写真を開いて見せた。この本を仕上げるために、私は時間を盗んで苦勞して取材や執筆を続けたが、夫もまた、どんなに辛抱して見ていてくれたことかと思つた。この本は幸いに江戸文学研究の權威、高田衛氏が日経新聞書評欄に好意ある書評を書いて下さつた。

夫は嚥下障害がひどくて鼻腔栄養が続くので、胃瘻を作ることになった。執刀の外科医から説明を受けて、手術の当日、朝早めに病室へ急いでいると、婦長さんが、すつと傍へ寄つてこられた。「また痙攣が起きたのよ」と小声で言つて、私を個室の方へ引つ張つていかれた。

夫は医療機器に囲まれて、ガーゼを銜えて震えていた。薬の量を変え、種類を変えて試しても、一向に収まらず、脳神経外科医の血管手術も受けた。しかしこれは血管に入れたカテーテルが左右の脳の片方にしか届かず、少しの効果しか得られなかった。痰が絶えず喉に絡み、危険な状態が続く。ベテランの看護師さんが二、三回、「これだけ痙攣が続くと、脳細胞がかなりダメージを受けていますよ」とさりげなく言つて下さつた。今考えると、私に、少しずつ事の深刻さを覚らせる配慮だつたと思われる。そして夫は、痰が絡んで窒息することを避けるため、気管切開が行われることになった。

その間に私がしたことは、森田淳子さんの紹介で、浄土真宗のお寺を訪ね、夫が亡くなった時に葬儀全般をお願いすることと、近くに出来た葬儀社の施設を見学し、葬儀と前後のすべての手順を訊ねることであつた。お寺でも葬儀社でも、費用を細かく伺つてメモをとつた。

「いゝまで聞く人は初めてだ」と、お寺のご住職はおっしゃつて、実に誠実に質問に答えて

下さった。私は血相変えていたに違いない。ご住職ご夫妻は快く暖かく受け入れて下さって、帰りに奥様が病院まで送って下さった。私たち夫婦は二人とも郷里を離れているので、万一の際にも、弟妹たちが駆けつけてくれるまで、私一人で、すべてを取り行わねばならないのだ。お寺と葬儀社を訪ねたことで、私はホッとして、その後の一年半を、何も心配せず看護に没頭することができた。夫はその年の暮、十一月お世話になった国立長寿医療センターから、隣市の病院に転院した。

夫が亡くなる三か月前に、郷里の老母が、半年ほど入院して亡くなった。九八歳であった。病院の看護主任さんによく夫の事を頼んで、私は葬儀のために帰省した。夫の母は、それより数年前に亡くなっている。夫がまだ在宅介護の頃だったので、ヘルパーさんに福井まで車で往復してもらって、夫の車椅子を押しながら葬儀に出席することができた。

私は二〇〇七年の十一月三日に、只野家のある宮城県中新田町の図書館で、真葛についての講演をすることになっていた。実は「わが真葛物語」が出版された年に依頼されたのだが、夫の病状があまりにも落ち着かないので、一年待ってもらっていたのだ。その頃私は、看護疲れから両膝を痛め、杖を使い、時には車椅子で病院へ通い、夫の世話をしていた。こんな状態でもいい講演ができるかどうか心配だったが、約束を違えることはできない。それに、中新田町の人に真葛について、是非話したかった。かかりつけの鍼灸院の先生の忠告で、車椅子で仙台へ行くことにした。女性史勉強会のお仲間、森田さん、杉本さん、浅野さんがついて来て下さることになった。

新幹線で仙台の次の古川駅に降りると、渋谷氏ご夫妻が、大型の車で待っていて下さった。中新田に到着すると、町は秋の文化祭で賑わっていた。講演会場の図書館ロビーには、真葛の手紙、歌稿などの文書類が展示してある。聞けば初めての公開だということに驚いた。そんな大切な文書類を、よく私のような他所者に快く見せて下さったと、感謝の気持ちで一杯になった。只野家の皆様はじめ多くの町民の方が熱心に、二時間の拙い話を聞いて下さった。隣の色麻町の町長さんも来て下さった。

講演がすんで、渋谷先生のお宅で、一同夕食のおもてなしを受けた。すべて自家製のお野菜を使い、奥様が腕を振るって下さった。長い間待つて頂いた講演を無事終えた解放感で、私は体が溶けそうな安堵感に浸っていた。その夜、仙台へ帰る車中で私が珍しくよく喋ったと、後で杉本さんに聞いた。仙台駅前のホテルで一泊し、次の日、皆で松音寺にある真葛のお墓に詣でてから、帰りの車中の人となった。その二日間は、娘が帰省して夫に付き添ってしてくれた。夫は中新田町での講演の二十日後、十一月二三日に亡き人になった。やはり夫は、私のために、死ぬのも辛抱して待っていてくれたように思われてならない。

以上が、私の六〇代から七〇代半ばまでのあらましが、活字にして他人様に読んで頂くような特別の事例とは思われない。人それぞれに人生の後半には、親兄弟のこと、子供のこと、連れ合いのこと、友人のこと、自分のこと、そこから派生する様々な問題が、火の粉のように振りかかってくる。それを振り払い、掻いぐぐりつつ必死に生き抜いているのではないだろ

うか。その中から何か少しでも充実した手応えが得られれば、十分に生きたと言えると思う。  
 八〇歳になった今は、何故か少し肩の荷が軽くなったようだ。時間が目の前を奔流のように流れていくが、それを苦にしても始まらない。流れるに任せよう。体があちこち悲鳴をあげているが、それも仕方がない。何しろ八〇年も使った体だから……。残された時間をいとおしみつつ、大切にゆっくり歩いていこう。

(作家・江戸女流文学研究家、愛知県大府市在住)



# わが真葛物語

江戸の女流思索者探訪

藤原書店

「わが真葛物語」 江戸の女流思索者探訪  
 門 玲子著 藤原書店 3600円＋税  
 滝沢馬琴を驚かせた「独考」、その著者の生涯とは。



# 江戸女流文学の発見

門 玲子

発見 江戸女流文学

藤原書店

江戸女流文学の発見 光ある身こそくるしき思ひなれ  
 門 玲子著 藤原書店 3800円＋税  
 第52回 毎日出版文化賞受賞

# 六〇代にようやく花が咲いた私

浅野 美和子

「二〇〇一年は……わたくしにとって特別な年になるだろう。……そのひとつは、六七歳を目前にして、初めて自分だけの本が出せたことである」「書いている途中で死なないようにと……健康管理に気をつけた。」

これは、拙著『女教祖の誕生』（二〇〇一年刊、藤原書店）のあとがきの一部である。

この時を遡ること二五年。四二歳のころ「如来教」の史料に出会い、研究を志した。

大学の研究生から大学院に進んで、先生方の適切な指導のもと、修士論文をやっと仕上げた。しかしその後は、まっすぐに研究を続けるというわけにはいかなかった。公文塾の教師などで学費は稼いでいたが、終了後は専門的な仕事がしなくなり、専門学校や、高校、大学の非常勤講師や、古文書の解読筆耕の仕事を引受け、何とか研究費を稼いだ。しかしこれらの仕事は、それ自体が自らの学びであり、片手間にできるものではなく、それ以外の時間を捻出するのが難しかった。

それでも『尾西市史』や『女と男の時空Ⅳ 近世』『日本地名大辞典 23愛知県』（角川）などの分担執筆の仕事のオフアールが来て、一所懸命に取り組んだ。年刊誌『江戸期おんな考』には、ほとんど毎号、女性史の論文を出していた。

ようやく「如来教」に戻れたのは、非常勤の仕事が減るころ、そして年金を手にすることが  
できる六〇代に入ってからだった。

還暦を迎えたとき、

計り得ぬ還暦ののちの月日などを繰り延べて為さむことを思へり  
身のうちに残る月日をまらばせて自由の未来賜物とこそ

などという短歌を作った。

いくつまで生きられるかわからないが、来たるべき六〇代には何をしようか、何ができるか、  
などと思い巡らし、この日までようやく保ってきた命を意のままにできるのが、まるで天から  
授かった賜物のようで、大切にしようと思ったのである。二〇〇二年には、若いときから作り  
貯めた短歌を集めて、歌集『自流』を上梓した。

おなじ如来教を研究する天理大学の神田秀雄さんから、如来教の史料集を作る話を持ちこま  
れ、私も望んでいた所だったので一緒に仕事をする事になった。四巻本を毎年一冊ずつ出す  
という計画だったが、とてもそうはいかず、結局七年もかかり、お金は一人一七〇万円（ただ  
し初回五〇万円のほかは、信者さんの寄付金や本を売った代金で充当）を負担するはめになっ  
た。年金を得ていなければ、とてもできる仕事ではない。神田さんは、私の年を考えて仕事を  
減らしてくれたけれども、江戸時代の名古屋弁の語りを口述筆記した史料に解釈をつけたり解  
説を書いたりする仕事は、ハードながら面白く楽しかった。史料集は『如来教・一尊教団関係

史料集成』全四巻として結実、二〇〇九年には完結を見た。

信心深い熱田の女性、きのが、苦難のあぐく神がかりして説教をし、近世後期の人びとの心を救い、結果としてひとつの新しい宗教を開いたその記録は、仏教と神道の習合した思想体系をなしていて、宗教思想史、社会史、女性史など、どの分野から見ても、興味の尽きないものだ。後の世の学問に貢献できたと思えば、ほとんどタダ働きであつても気持ちには充実する。この史料集を広く世の中に知ってもらうために、広告のチラシを配り、学会発表もした。

それでも二〇〇三年から七年間、準備期間を加えれば十年近い年月を、六〇代後半から七〇代半ばまでの老力を振り絞って作つた本は、売れゆきが悪く、編者二人と出版社清文堂に若干ずつを残して「断裁」という目に遭つた。あまり気分の良いものではない。

同じことは、私の『女教祖の誕生』（藤原書店）についても言える。如来教教祖、喜之の伝記とその宗教思想について書いたこの本は、修士論文を骨格にして、さらに考察を深めたもので、六〇代前半から取りかかり、六七歳までの時間を要した。宗教学者の島蘭進氏や評論家の呉智英氏が、新聞紙上に推奨文を書いてくださったりした。有名人の本は何十万部の売れ行きというが、この本は一五〇〇冊印刷して二〇〇冊ほどを残し、あとは紙くず。文字通り烏有に帰してしまつた。六〇代、七〇代に咲かせた花は実を結んだが、嵐のために吹き飛んだようなものである。それも仕方のないことか。「売れる本がよい本」とは限らないのだ。

『女教祖の誕生』のあと、それまでに方々の雑誌や本に書いた文章を論文集にして『ジエン

ダーの形成と越境』（二三〇〇円）という本を私家版で出した。これは宣伝力が無い分、さらに売れず、四分の三ほどが梱包のまま腐りもせず、紙くずにさえならず、おとなしく物置に眠っている。私の死後、娘たちが処分に困るのだろう。しかしここには、私の女性史の諸局面、女性史についての私の物の見方を網羅的に示したつもりである。

五〇代後半にワープロで文章を書くことを覚えた。女性史の同好誌『江戸期おんな考』ではワープロ原稿が要求されたからである。ワープロ専用機を二台使いつぶしたが、二代目のワープロが壊れると、あとはコンピュータとなる。もう十年以上も、どこへ原稿を出すのにも、パソコンで書いている。書き直しや推敲が簡単に出来、腕や頸肩の疲れも、手書きよりは軽いうえ、出版社、編集者にも喜ばれるので、もうパソコンは手放せない。ワープロ時代に使っていたフロッピーディスクなども要らず、添付ファイルで即時に入稿できる。しかしこれを使いこなすのは、なかなか大変で、未だに娘たちや近所の人の助けを借りることしばしばだが、今はパソコン三代目、デルのラップトップを気に入って、何とかペン代わりに使用している。

育児のため家にこもっていたころ、「将来こうしたい」という夢を、いくつか育てていた。

- 1、女性史・女性問題の研究を続ける。
- 2、自分の歌集を出す。
- 3、英語を読み、書き、話す。



- 4、友人を作る。
- 5、ピアノを弾けるようになる。
- 6、旅行がしたい。国内外を問わずまだ見ぬ土地、曾遊の地にも。
- 7、経済的自立。

このうち1・2は、どうにか達成しつつある。

3の英語は、まだ途上であり、おそらく生きているうちに達成できるものでもないが、外国へ行ったとき、国内でも外国人に会ったとき、少しでも話ができれば嬉しい。ちょっとした新聞や文献でも読めたほうがいい。数人のグループで、水曜日の夜、学校のALTを先生に頼み、習っている。ALTは、いろいろな国から来ているため、それぞれの国のなまりがあり、個性も違う先生の出身地の異文化のことを学べる。それが面白い。グループでは、いつのまにか年齢は私が最長老になったが、五〇代から始め、七〇代の現在までやめられない楽しさがある。

4の友だちづくりは、〈あごろ〉をはじめ、いろいろな場面で自然に人と繋がりが出来、話したくなる私でも、共通の関心や話題で盛り上げられる。人生の分岐点で去就に迷うとき、なくてはならぬのは友だちの存在である。喜びや楽しみを分かち合う、それは誰でもいいわけではなく、私にしか、あなたにしかわからない喜び楽しみがある。近所の人に本が出来た喜びを語っても、ひけらかしているとは思われないから。まして辛いこと、悲しいことは、誰にでも話

そうという気分にはなれないし、喜びしみと同じく、解ってもらえる共通の感性や経験を持つ人でなければ話し甲斐がなく、そこから解放されて立ち上がることもできないが、幸いにして、こういう先輩（先生を含め）や友人を、何人か得ることができた。先輩・友人の本が出来れば、万歳と叫びたくなるし、一日でも早く読み、そこから何かを学びたくなる。友人の病氣や不幸は自分のことのように辛く悲しく、「早く立ち上がってほしい、何とか力になれないものか」と思う。親友の門玲子さんとは、書く内容も考え方も近いので、原稿の下読みも、しあう。

〈あごら〉〈国際婦人年あいちの会〉〈女性研究者の会〉〈総合女性史研究会〉〈女性史総合研究会〉〈研究会・女性と仏教〉、一宮で私が担当する講座〈びさい古文書の会〉英語の会〈すばる〉〈九条の会一宮・尾西〉そのほかさまざまな学習会・研究会や運動体（これらの中には、すでに任を終えて散会したものもある）では、その会の目標に添った活動をするとともに、よい先輩や友だちを得られることが大きな収穫である。まことに友は財産である。こういう財産を四〇代から七〇代にかけて、たくさん手に入れた。

5のピアノは、全くだめで、そんな夢を持つこと自体、おこがましかったのかも知れない。娘たちが小さかったころ、いっしょにバイエルを終りまで弾けるようになったが、そこでエンコしてしまった。それでも通りがかりの家で子供が弾いているピアノに耳を傾ける。夢に終わった夢の懐かしさ、そんな感傷に浸れるのも、六〇代七〇代のひそかな喜びだろうか。

6、これまでに国内外を旅行できたのも、よい経験だった。「国際女性年」などの催しに仲間が外国へ出かけるころ、私は体調が悪く、条件も調わず参加できなかったが、国内の研究会には参加していた。家族旅行にも折々出かけた。六〇代以降は一人旅が多く、それも研究会参加や調査の旅が多い。

三年ほど前の夏、北海道大学で学会があり、それに出たあと、旅程を延ばしてアイヌの男性太田さんに案内と運転を頼み、如來教の研究者の神田さんと、アイヌに関する土地を旅行した。旭川で太田さんがアイヌ語を教えている子供やその親たちと交流。そのあと、『アイヌ神謡集』の翻訳をして大正十一年に二〇歳で亡くなった知里幸恵の記念碑や記念館を見ることができた。七〇代になってからの思いがけぬ幸せのひとつである。

たまには興味だけでふらりとどこかへ行きたいと、この春には鞆の浦へ一泊の旅をした。ツアーなどに加わるのではなく、インターネットでホテルを予約し、鉄道を探して行くのは、旅の見聞とともに自由と浮遊感を味わえるのが醍醐味である。

このごろは九〇代を軽やかに生きる人が話題になっているが、私の恩師、清川妙先生も、その一人で、最近「九十歳。生きる喜び、学ぶ楽しみ」という本を出された。著書はこれまでに百冊を越える。雑誌に古典を読む楽しさを連載し、あちこちで講座を持って、古典やエッセイの書き方を教え、家では一人暮らしでおしゃれを楽しむ。六年前の本は「八十四歳。英語、イギリス、一人旅」だった。国語の先生だが、外国へ行く時は「清川旅行社」を通じて、つまりホテルや飛行機の予約、鉄道のチケットの入手も、全部、人の手を借りず自分です。よほど

英語が達者でなければできない技である。私には永遠に憧れのひとだが、こういう人にとって、六〇代とは何だったのだろう。俗にいう「涙垂れ小僧」などではない、すでに諸々の苦しみに打ち勝ち、自力で登った坂をさらに登り続ける踊り場は、まさに「女ざかり」だったに違いない。

7の経済的自立。これは願みて慍慍たるものがある。結婚しても仕事を続けたいと願ったが叶わず、子供たちが小さい頃は、日本が「戦後」から高度成長期に向かう時期で、毎日夫の帰りは遅く、一人できりきり舞いをしながら三人を育てた。自分をすり減らす毎日に、「これは本当の私ではない」という思いから通れられず、右にあげたような夢を子供といっしょに育てたのだった。子供たちは思うようには育たなかったが、結婚生活の初期から三〇代後半までを育児に充てたことは、やむを得ないことであつた。

人間を三人造る。そのこと自体りっぱな社会貢献と言えないか。社会の存続は、人間の生産と人間を養う生活資料の生産から成り立っており、生活資料の生産だけが評価されてよいはずはないのである。子供を産み育て子孫を形成するという私的な営みは、そのまま社会存続への貢献ともなる。女が出産・育児をしながら社会的生産活動ができるという条件は、最近ようやく整いつつあるが、与謝野晶子ならぬ私は、貧乏に耐えつつも、あの時代に同時並行的に両者の活動はできなかった。三〇代から次第に経済活動を広げ、生活費に私の稼ぎの一端が入って暮らしも潤うようになった。四〇代には研究者の道を選び、それで多少ともお金を稼ぐことができるようになった。生きているという実感が持てるようになったのは、そのころからである。

研究にフルに時間を充てることができるようになったのは、子供が成長した五〇代。年金が貰えるようになった六〇代が、制度的には社会の第一線から引く時期だというのは、皮肉というべきか。

子供たちは、両親の銀婚式や金婚式、古稀、喜寿、傘寿などを祝ってくれるようになり、人生の通過儀礼上、今は収穫期というのかも知れない。子供を産み育ててよかったと思う。

私はいま、如来教の研究を一度棚に上げ、野村望東尼の研究に取りかかっている。幕末の福岡に生きた武家の妻・望東尼は、六〇代で大活躍。日本海の孤島、姫島に囚われの身となるなかで、すばらしい日記や歌作品を仕上げる。新しい世の中を夢見つつ、近代の幕開けと同時に六二歳で亡くなるが、この人の「長くない六〇代」も、女ざかりだったと考える。如来教の教祖、喜之は、七一歳まで生きるが、その六〇代は教義が完成し、教団が発展を遂げる時期にあたっていた。

いま思ひ出す。「あごろ」17号に「女性史との旧交をあたためる」という一文を書いた。如来教というテーマを見つけ、初めて大学の研究生になった時のことを綴っている。その時引用したおみくじの文句「花咲き実る末も見えつつ」の「末」に、現在は、あたるのだろうか。

一九七七年のその時以来、三四年経っている。この先、何年、ほけないで生きられるか、緩やかな坂を上りながら、七〇代の今も「女ざかり」だと信じていたい。

## 七〇代だつて

### 捨てたものじゃない

山下 智恵子

古稀を過ぎてから、私より年上の男たち五人と語り合つて、同人誌を創刊した。

「私が七一歳。一番若い」と、はしゃいで言つてみるが、「肉体的にも精神的にも、兄貴分たちのほうが私より勁く、若々しい」と、内心、舌をまいた。

三号雑誌でつぶれるのでは……と、ひそかに危惧していたらしい周囲の思惑を裏切つて、今年の初夏に三号、深秋と洒落た名をつけて四号を出した。

平等にみな一つ歳をとつたが、なんとか頑張っている。体調を崩し、一時は「次の桜はもう見られないかも」と思ったのに、しぶとく復活し、連載小説まで載せているのだから、その図々しさに、自分であきれてしまう。

六〇代は、今から思えば、とても華やかだった。

ボーイフレンドもいたし、単行本『野いばら咲け——井上光晴文学伝習所と私』を風媒社から

刊行した。病気をいくつか抱えながらも、ポルトガルへも旅したし、末娘の在住するアメリカ、カリフォルニア州にも出かけた。

本好き、映画好き、おいしいものの好きの三拍子そろって共通項を持つ者同士の、読書会も続いていて、まだまだ誰も終わりにしようとは言い出さない。

長年、ほそぼそながら続けてきたヨガ教室の頭には、今もBOCという名称が健在。これも、ヨガよりアフター・ヨガの効用のほうが勝るかもよ、と、仲よく感じの良い、味の良い店をあくなき追求心で、食べ歩いている。

大震災や原発事故、心ふさぐことは多々あれど、六十路、七十路、これぞ人生の実りの時期。他も愛し、自己も愛し続けようと、意気は衰えない。

この秋、私は、生還を目標に、中国山西省にある黄土高原の農村へ短い旅をした。

戦争の傷あとをしつかりと見た。何億という農民たちが置かれている差別的状況も、身をもって知ることができた。人生観が変わる旅であった。

(作家・名古屋市在住)

# 続・ブラジルの女性は、いま

藤井 里子

寄稿をお勧め頂いて、ありがとうございます。

普段はサンパウロで発行されている「日系ブラジル文学」という同人誌に寄稿していますが、今回、六〇歳で仕事から完全にリタイアして、本格的な「ブラジル研究」を開始しました。

実は「あごら」には、一九八四年四月、85号「平等法上程を急ぐ労働省」に、「ブラジルの女性はいま」を寄稿したきりです。その続編として、ポルトガル語の基礎からの勉強のため、二〇一〇年、念願のサンパウロ大学への語学留学を果たし、帰国後も、個人教授によるレッスンを受けています。若い時は、仕事・子育て・家事・社会活動等でハードな日常でしたが、現在は、語学習熟と翻訳作業だけに集中して、七〇代の自由を満喫しています。

## 異文化理解

ブラジルは、一〇〇か国以上から移民を受け入れて成り立っている国なので、日本のように子どもの頃は日本人だけ。国籍は日本。日本語を話し、歴史的にも固定的な常識に疑問を持つということはなく、価値観も同じという環境から一歩出ると、最初は、いわゆるカルチャーシ



ヨックで適応に時間がかかります。まず、経験から言うと、タクシーに乗る時、重要人物、または一人なら、助手席に乗るのがこちらの常識。大統領でさえ、車での移動は助手席と決まっているという。後ろの席は、部下や席次の低い者。

サンパウロの町は南米一の大都会で、大阪やニューヨークにも劣らない規模ですが、官庁街、繁華街問わず歩道にゴミが散乱しているのには、驚きます。無論、清掃員は常にいるが、歩く人、乗り物に乗っている人、いずれも歩道、車道にゴミを捨てていく、一説によると、「清掃人の仕事を作ってやるのだ」とのコト（失業対策事業か?）。公衆道德の欠如と見るのは、日本人。そのくせ、乗り物に乗る時、また、銀行、郵便局ほか、窓口には必ず一列に並ぶ。どんなに長くなっても……。これには感心する。イラついてズルする人はいない。

一番感心するのは、ファッションが個性的なコト。毎日、バスやメトロに乗って通学していると、日本のサラリーマン、オフィスレディ、学生とは、全く違って見える。勤め人と思われる人でも、どこか遊びに行くような格好。女性は男性以上にきらびやかで、決して高級な宝石、アクセサリーはつけていないが、ともかく何かを、衣服、胸、腕、足首につけている。手や足の指は、マニキュアを欠かさない。服装は、肉体の見える部分のほうが多い、というスタイル。座席に座って周囲を観察すると、混んだ車内なら、鼻先にお腹やおへそがくつつくという事態になるほど、露出度が多い。

彼女らは、どんなに太っていても卑下する様子がなく、大きな乳房を誇り、ついで二段腹も

誇示する。女子学生の格好は、もっと過激で、短パン、刃丸出し、「下着のまま学校に来たのか」と錯覚するほど。男子も、負けていない。あご鬚、三つ編み、長髪、丸坊主、刺青……なんでもござれ。きたない穴開きジーンズ。ホームレスもまっ青な若者が、手に難しそうな分厚い本を何冊も持っているのを見て、やっと州立大学の学生かと思う。校舎の中に入るには、必ず学生証が必要なので、本物のホームレスの出番はない。

食べ物の量の多さ。レストランに行くと、一人前が二人分ある。各国の料理が出揃っている。ポルトガル・スペイン・イタリア・フランス・イギリス・ドイツ・アラブ・北欧・アフリカ・中華・韓国・日本……、食の代表選手の主戦場みたいなのがサンパウロである。この町で暮らしていると、世界旅行の必要を感じない、ただし、食いしん坊だけ。それぞれ「本国のものより、おいしい」との評判で、日本の寿司などは、魚は冷凍せず、近海もの（遠洋漁業じゃない）なので、生で食べると、信じられないほどおいしい。先日もスペイン料理のパエリアを食べたが、そのオーナーいわく、「今のスペインでは、こんな贅沢な海鮮ものは手に入らない」と。伊勢海老・オーム貝・ハマグリ・たこ・あさりなど、鍋からこぼれんばかりの豪華さだった。

一方、所得格差は、近年、経済成長が著しくなつて、だいぶ縮まってきたが、広大な国土ゆえ、依然として地方と大都会との格差は大きい。

二年振りにサンパウロに来て一番変わったと思ったのは、携帯電話の普及のすごさである。「猫も杓子も」と言うほど、誰も彼も持っている。中学生ぐらいから、おばさん、おじいさん、

失礼ながら、どう見てもホームレス寸前と思うヒトも、破れたズボンのポケットから、小さな携帯電話を出して大声でしゃべりまくる。バスやメトロの車中で、マナーモードなど知るものか！ 日本でもかつて、高度経済成長期に流行った一点豪華主義なのだ。「日銭暮らしで貧しくても、携帯電話だけでも持っている」と見せびらかし、心が豊かになるという心理らしい。

短期間の旅行だけでは見落としがちな庶民の行動パターンは多様で、面食らうコトは数知れなく、つい、日本では……などと自国の習慣を正当と信じ、この国の理不尽な事柄に眉をしかめるが、考えてみれば異文化だから不当だと言えるか、この国の人が日本を見れば、おかしい民族習慣を奇異に思うだろう。

「日本人は自己主張をしない、何を考えているかわからないから不気味だ」とか、「親しさを表すボディタッチ（頬にキス、抱き合う）をしないので冷たい」など。

日本国内で当然だったはずの習慣が、そのままでは通用しない世界に。心身を晒す体験で、改めて自分が身に付けてきた文化を意識し、異質なものに晒されるだけの精神的抵抗力のない人びとの痛みも、同時に感じる機会になる。

国際交流の大事さを、声を大にして叫んでも、一般論で終わり、相変わらずマスコミからの加工された情報に、首までどっぷり浸かっている現在の状況から少しでも脱却するために、安全第一のバックツアーをやめ、旅の本来の意味、日常性から離れて危険と隣り合わせの生活を経験してみるのも、長い人生のひとつコマに、あってもいいのではないか。

こちらのツアーコンダクターの話だと、「日本人の客ほど扱いにくい人はない。自国と同じ扱いを求め、冒険心皆無。自分の馴染みのない物への拒絶。欧米より後進国だと思っていて、人種差別的態度でブラジルを見下す。根深い白人コンプレックスは明治の文明開化以来、連綿と続いてきている民族性で、世代が交代しても再生産され、この国の多人種構成に抵抗を感じる日本人がいるのは、知的な民族と思われているだけに残念だ。この点ではブラジルは、「どの民族出身か」など、気にしない。皮膚の色、顔の造作、身長いかなる人にも、等しく国民として平等に接している。無論、人種差別は法律で厳しく禁止され、発覚すれば刑事罰で収監される。したがって、日本では避けられそうな身体造作のヒトでも、生き生きと生活している。これらの人が、もし日本に住む機会があつて渡日したら、たちまち過酷な視線に心が痛むだろう、と想像する。」

## 二〇一〇年のブラジル大統領選挙の様子

選挙の方法は、日本と違って十八歳以上。投票は義務で、指定の場所に行き、手書きでなくコンピュータ操作で実行。実際に私は、孫娘に付いて近くの中学校に行き、投票場に入れてもらい、眼の前で投票の様子、立会人の数など確認しました。

学校の門の前は、候補者のチラシが山ほどあつて、ゴミ化していました。警察官が立っていました。外国人である私を見てもとがめる様子なし。どうも私の服装が立派に(?)ブラジル

人化していたからでしょう。

各居住ごとに教室が分かれていて、孫娘の持つているカードを見せたら、有権者の確認をされます。幾つもある教室の、指定された部屋に入り、立会人三人の前で再度本人確認。続いて投票行為を隠す衡立があつて、その中の机の上に、コンピュータ端末が置かれています。キーボードでなく、大きなボタンがいくつもあり、候補者の番号を押すだけの簡単な操作で、身体の不自由なヒトや文字の書けない人も、ラクに投票できます。

その夜のうちに、日本の二四倍の国土全部からの集計が可能で、翌日の新聞に結果が出ます。中東やアジア・アフリカなどの一部で、選挙時には必ず妨害行為が起る国からみたら、実にあつけない選挙風景です。

投票は、法律で義務になっているので、投票率は当然高く、国民の関心も結構高いそうです。大統領候補は、一回の選挙で過半数取れないと、一か月後に上位二人の決戦投票になります。私が俄然興味をもったのは、一次選挙までは男性候補七名だったのが、五人落ち、上位三人の中に、女性が二人もいたからです。

その女性候補二人のうち、一次投票で惜しくも破れた、アマゾン出身のマリーナ・シルバという女性は、教師から上院議員として出て、環境問題への取り組みに力を入れている、地味だが若い有権者に人気のある候補者だったのです。次回二〇一四年に向けて、彼女は活動するだろうと予想されています。

決戦投票で、産業界から絶大な支持を受けていた男性候補が落ち、ブラジル東北部の貧しい

人びとが支持していた女性大統領が初めて当選したこと。それも、有名な妻や娘という身内縁故でない人で、かつての過激派に属していた女性だったことで、私は驚きました。

## 二〇一一年ブラジル新大統領の経歴

ジルマ・バナ・ルセフ (Dilma Vana Rousseff)

父親ペドロ・ルセフは、一九二九年、世界恐慌の起きた年に、ブルガリアから移民として来て、ブラジル人の母親ジャンシルバと結婚。ジルマは、一九四七年十二月十四日にミナスジュライス州の首都ベロ・オリゾンテに生まれた移民二世である。

彼女は、「移民の子で、女性」という二重のハンデを跳ね返しての勝利だった。十六歳で当時の左翼思想に共感し、二〇歳で革命集団に入党し、ゲリラとしての過激な訓練を秘密に受けた。七〇年代は、左派活動家として、さまざまな仮名を使い、偽造した身分証明書には「サンパウロ内陸部奥地の出身」だと書いていた。「一九七〇年一月に軍事政権に逮捕され、数週間、残酷な拷問を受けた。「電気ショック、棒にぶら下げる拷問」など、死の恐怖と戦いながら、同志や自分の命を守るため嘘をついたことを、今も誇りに思っている」と言っている。

上記のような過酷な取調べを受けたが、二六歳で釈放され、ブラジルの最南端に位置する、リオ・グランデ・ドスール州にある、有名なポルトアレグレ、フェデラル大学に入学し、経済学を修める。一九七七年に卒業。その後、リオ・グランデ・ドスール州に採用され、一九八

五年には、政治政党PDT(民主労働党)の幹部補佐役になった。彼女は、ポルトアレグレ市の収入役や幹部に登用され、その持てる実力を政界に發揮し始めていった。続いて州統領直属の経済・統計・通信・エネルギー分野における重職に就き、二〇〇二年には、ルーラー大統領再選の選挙活動に加わる。

そして二〇〇五年、当時のルーラー政権内部で起きた汚職事件(Mensalaoメンサロン事件)で、CASA CIVIL(開発庁)長官が引責辞任した後任に拔擢され、ルーラー大統領二期目には、ジルマは、利害の調整力に目を見張るばかりの実績をあげていった。そんな彼女のことを「PAC(経済発展推進プロジェクト)の母」とルーラーが呼んだほど、彼の信任が厚くな

った。

二〇〇八年には、躍進するジルマの追い落としを狙った新聞記事が出たが、彼女は、その根拠のない悪評を否定した。二〇〇九年には、リンパ器官の癌が見つかったが、三か月ほどで懸命な治療の功を得て完治した。翌二〇一〇年、第四回労働者党全国大会で、公式に大統領候補の指名を受けることになった。

選挙戦は、「現職大統領の支持を受けているから有利」と思われたが、各政党間の利害が錯綜していて、激戦であった。第一回の投票では、過半数を獲得できず、一か月後の決選投票にもつれ込み、あらゆるメディアには、この選挙戦の情報が溢れかえった。テレビは連日、国民の視線を取り込もうと候補者の対談を放映し、彼らの名前の連呼に明け暮れ、新聞は、民衆にわかりやすいように紙面の大半を、奇抜なイラストで埋め尽くし、私のようにポルトガル語に

不案内な人間でも、何とか支持率の比較ができるだけの知識を得ることができて、面白かった。十月三十一日の決戦投票の結果、「女性大統領誕生決定」をテレビで見て、その場で特派員気取りで日本へメールしたら、「新聞社より早いニュースだ」と友人たちは驚いていた。何しろ、投票が終了した日の数時間後には結果が出るのだから……。世界に先駆けたIT機器を利用した投票システムには脱帽。

ジルマは、ブラジル初の女性大統領であるだけでなく、一九二六年のワシントンルイス以来、国民から直接選挙で、一度の立候補で当選したことでは、コロールやカルドージョなどの大統領同様、珍しい人である。それ以前の大統領は、前大統領にしても、何度も立候補して選挙戦を闘ってきた経験がある。

さらに言えば、これまでの男性大統領のほとんどは、若い頃から政界で働き、各州のトップを経験し、首までどっぷり政治の世界に漬かったプロフェッショナルで占められていたのに比べ、行政官としては専門手腕が抜群で、その能力を買われてはいるが、国、全体を統治するには未経験な事が多く、幾多の困難が待ち構えているものと予想される。

私は前に述べたように、「ブラジルはよその国でなく、私の可愛い三人の孫たち、そして私の子孫が生きて行く国」です。自分の国の将来のことより気になります。

新しい女性大統領は、まず、最初は大統領府の三七の組織の官僚や二〇万人に及ぶ国家公務員の人事、他に選挙で協力して貰った元大統領や同盟政党との関係など、整理する必要があります、



膨大な仕事が続いている。今後、多大な努力と共に、彼女自身の目的であった広い国土に住む人びとの遠隔地の問題や貧しさからの脱却などを解決するために、任期二〇一四年まで、その政治力を発揮してもらいたいと、個人的にも願っています。

## ジルマ・ルセフ大統領のプロフィール

結婚は二度したが、二度とも離婚。大統領選挙中に一人娘が出産し、男の子の孫ができた。彼女は強情な性格でありながらも才能抜群。左翼的な理論家で知られているが、趣味も豊かで、音楽はアイポットでいつも聴いている。それに、「酸素ボンベを背負って、海や川で潜水するのが大好きだ」と言う。

ブラジルの大統領府であるブラナトル宮殿に、過激派のゲリラだった女性が入るなんて、初めてです。前述のとおり、彼女は、生まれ故郷のペロオリゾンテで、十六歳の頃から左翼組織に共感し、後、ウルグワイにあった秘密基地で銃の扱いなどのゲリラとしての訓練を受け、サンパウロやリオデジャネイロなどの大都会で、軍の独裁政治に反抗を繰り返し、逮捕された経験がある。しかし民政移管後は、再民主主義化を目指した政府に協力し、専門の経済学では、その明確な理論では卓越している。

(2011年10月17日)

(ブラジルを知ろう会) 代表・大阪在住

# 管理栄養士が 家にやってくる！

江川 美晴

管理栄養士を知っていますか？

管理栄養士に会ったことがありますか？

管理栄養士について、どのような印象をお持ちですか？

管理栄養士は、病院で特定の疾患の方に「栄養指導」という、厳しい制限を申し渡す、ちょっと煙たい存在なんて思われているのではないのでしょうか。そんなことを管理栄養士の私が言ったのでは、立場がないと管理栄養士の皆さんにしかられてしまうかもしれません。

実際、管理栄養士に会われた方は、たぶん「そんなことはない」とおっしゃってくださいるのではないのでしょうか。

私は、三六歳にして大学に進学し、管理栄養士の免許を取得した、ちょっと変り種の管理栄養士です。それまでは、コンピュータの世界でシステムエンジニアをしていました。

先に述べた管理栄養士のイメージは、その時の私のものです。健康で（現実には、仕事でちっとも健康的でない生活を送っていましたが）病院を敬遠していた私にとって、管理栄養士さん

が何をしている人なのかよくわかっていませんでした。きっと、病院に行ったら、病氣を見つ  
けられて、生活改善の指摘を受ける（イコール）、あまり、うれしい相手とは、思っていま  
せんでした。

こんな私が、なんで管理栄養士になったのかということとは、また何かの機会があれば、お話  
しさせていただけたらと思いますが、一念発起して、管理栄養士のための勉強をし、正しい知  
識を身につけ、厳しい先生方にしごかれ、管理栄養士が何者なのかがわかると、今までの印象  
が一気に拭い去られました。

管理栄養士さんは、とつてもいろんな知識を持っていて、やさしい気のいい人ばかりでした。  
時と場合によっては、厳しいことをお話ししないといけないこともあります。どちらかとい  
うと、おっとりしたタイプの人が多いように思います。それに、カウンセリング論や心理学な  
ども学び、寄り添う指導を心がけています。

そんなやさしい管理栄養士さんが、在宅療養している方のお宅に伺って、栄養相談や献立の  
アドバイスを実施できる制度があります。「居宅療養管理指導」という制度です。

「居宅療養管理指導」は、医師や歯科医師、歯科衛生士、薬剤師、管理栄養士などが、家庭  
を訪問して在宅介護に必要な指導や助言をすることです。基本的な対象は、「通院が困難で療  
養上の管理や指導が必要な方」ということになっています。

管理栄養士は、「生活習慣病などの特定な疾患に対しての制限食の指導」というイメージが強いと思いますが、高齢者の介護で、食に關しての大きな問題は、低栄養なのです。「食べてはいけない指導」ではなく、「いかに食べてもらうか」ということを考えなければならぬのです。「見た目では、太って見えても、実際には低栄養」ということが多いのです。どうしても活動量が減少するので、食事量も減少します。それに加えて、肉・魚などのタンパク質の摂取量が、極端に不足しています。

「もう身体が大きくならないから、栄養物は必要ない」というのは、大きな誤解です。

私たちの細胞は、毎日、新しく作られています。私たちが、座ったり、歩いたり、身体の維持をするのには、筋肉がとても必要なのです。この筋肉になるのはタンパク質なのです。「寝返りが打てない」「足や手に力が入らない」ということは介護する方に大きな負担になります。筋肉は、脂肪より重量があるのですが、筋肉があれば、身体介助時にしっかりと力を入れて、意思をもって動いていただくことができます。介護する方、介護される方、両者にとって、とても大切なことなのです。

もっともっと知っていただきたいと思っています。

管理栄養士は、ご本人様とご家族にお話をさせていただき、「より快適な居宅療養環境」へのお手伝いをさせていただける「食のスペシャリスト」です。

介護の世界に、管理栄養士の活躍の場が、これからもっともっと広がっていくと思います。

食べるってすばらしいことです。五感（視覚・嗅覚・聴覚・触覚・味覚）のすべてをフル活動してできる、唯一の身体活動なのですから！

「いきなり、台所に入って何か言われたらいやだなあ……」というようなことを言われる方がありますが、そんな図々しいことをいきなりするようなことはありません。

まずは、みなさんと信頼関係を築き、お困り事の相談役として、家に管理栄養士を呼んでみてください。

管理栄養士を家に呼ぶのには、主治医、またはケアマネージャーにご相談いただくか、訪問栄養管理栄養士の事業を展開している事業所にお問い合わせください。

「居宅療養管理指導」のサービスは、介護保険の支給限度基準額の枠外で行われ、自己負担金額は一割となっています。費用については、介護保険の枠外ですが、ケアプランには組み込む必要があります。

介護される本人だけでなく、介護する人も同席して指導を受けると、その後の療養改善に効果があります。

また、このサービスは、希望により、自宅だけでなく、グループホームや、有料老人ホームなどの特定施設に入所中でも利用することができます。

（日本向老学会会員・管理栄養士、三重県松阪市在住）



# 「一億総懺悔」の国に生きて

堀場 清子

一九四五年の敗戦のあと  
やたらに飛び交う言葉があつた

「一億総懺悔！」

拒否の術なく赤紙に拉致されて

南方の島に放り出され

ヒルにまみれてジャングルを敗走し

餓死した兵士らに

なにを懺悔させるのか

八月六日の朝八時すぎ



広島市中心部の建物疎開に駆り出されていて

原子爆弾の劫火に焼かれ

見分けも付かない肉塊と化し 炭と化し

全滅した中学一年生たちに

なにを懺悔させるのか

貧困に迫られて

女衞の辣腕に追いたてられるまま

南海の孤島で兵隊相手の慰安婦とされ

軍の撤退で遺棄された女たちに

なにを懺悔させるのか

働き手を召集で奪われて

空襲で焼け出され

今日の糧にも窮する庶民らに

なにを懺悔させるのか

生命も財産も 文化までもことごとく

艦砲に喰いつくされた沖繩で

奇跡的に生き残ったひとびとに

なにを懺悔させるのか

戦時中の枢軸国のうち

ドイツではヒトラーが自殺した

イタリアではムソリーニが情婦と共に逆さ磔となった

日本だけは なんにもなかった

戦勝国の報復的断罪以外には……

権力には必然に 同じ重量の責任が伴うだろう

暴虐なまでに権力を乱用したあげく

責任には そしらぬふりしてすませられる

この 薄気味悪い 国

戦争をはじめた 責任



戦線を統率しきれぬまで拡大した 責任

降伏を故意に引き延ばし 犠牲を甚大にさせた 責任

そのどれも問われぬ 不可解な国

開闢以来の伝統なのか

それとも近代になって変質したのか

三・一一から五か月たつが

人災 福島第一原発の過酷事故について

責任を問う声を聞かない

国策として原発政策を推し進め

世界有数の地震国 日本の全土に

住民を危険に曝す原発を 五四基も建設した

中曽根康弘以降の自民党歴代首相は

フクシマの現場に集まり

切腹しては どうか

それくらいの責任は あるんじゃないか



数知れぬ被曝者の　これから長年にわたる悲劇  
家を追われた人びとの嘆き　農地を奪われた人びとの失意  
碎かれた無数の人生　国土の広大な放射能汚染  
それらに責任をとるべきではないか

国会では自民党議員が

内閣の原発対応を糾弾する

自民党としての責任は　どう考えているのか  
シャラッとした責任不感症の顔付きを  
不思議な気持ちで眺める

しかもどこからか

聞き覚えのある節廻しが流れてくる

過疎地の原発が作る電気を使っていた　わたしたち

「みんなが悪いのよ」と

その「原罪意識」を否定はしないが

それより先に 問わねばならぬ責任はないか

人災 福島第一原発過酷事故の責任を

わたしたちは はっきりと糾明すべきだ

そこから新しい一歩がはじまる

権力なき弱者のみが懺悔させられる

奇妙な社会の特殊性から

この不幸な機会に 脱却しようではないか

問うべき責任を問わず ひたすら沈黙する習性から

今こそ 自己を解き放とうではないか

〔いのちの籠〕第19号より

## 一枚の写真

— 隠されていた放射能の恐ろしさ

小田 美智子

はじめに

3・11東京電力・福島原発爆発事故が起きて、広島型原爆の数百倍の放射能が放出され、日本中が目に見えない放射能で汚染されてしまいました。原発と原爆は、放射能からみると、同じ物だったのです。この惨事をきっかけに、「世界は恐怖する」という映画が、再び人びとの注目を集めています。この映画は、今から五〇年以上も前の一九五七年、アメリカやソ連が、空中核実験を盛んに行なって、地球を死の灰で汚染していたころ、日本で人工放射能汚染に取り組んでいる大学や研究所の記録を集めて、それを編集して作られたものです。

映画の製作者、亀井文夫さんは、この映画を作ったいきさつについて、著書である岩波新書『たたかう映画』の中の「世界は恐怖する」という章に、次のように書いています。「核実験によって、人間の歴史始まって以来の大規模な生命の危機が迫っている現実を、黙って見過ごしてはいられない腹立たしさが先に立って、死の灰の実態にメスを入れようとした」と。

日本は広島・長崎・ビキニと、三度も核兵器の被害を経験した国です。世界中のどこの国よ

りも放射能の危険性を知っているはずの国が、3・11の惨事を招いてしまいました。起きるはずがないといわれていた原発の凄まじい事故がチェルノブイリで起きて、阪神・淡路大震災が起きて、「原発が地震で壊れたら大変だ」と言われても、原発推進は変えませんでした。

立ち止まって考え、原発を止める選択をする機会が何度もあったのに、どうして、このような惨事を起こしてしまったのだろうかと考え、とても不思議な気がします。きっと同じような思いの方もいらっしゃると思います。

その疑問を解くカギが、亀井さんの警告と、福島原発事故後に、フリージャーナリストの上杉隆さんが発行された『報道災害』の中で指摘されたことを考え併せることで見えてきたことがあります。

ここでは、そのことと、チェルノブイリ原発事故から二五年経った放射能汚染地で起きていること、政府の安全基準は、ヒトを守るものではないということをお伝えします。死の灰で汚染つくされた日本で、これからも生き続けていくために、少しでも参考になれば幸いです。

## 「世界は恐怖する」

映画「世界は恐怖する」には、小鳥やウサギ、稲などを使って放射線を被ばくさせる実験の様子が映されています。

最初のジュウシマツのオスとメスを使った実験は、厚さが一メートル近いコンクリートの壁

で囲まれた地下室で行われています。

二羽の小鳥は鳥籠の中で、元気に動き回っています。そこにガンマ線が当てられると、小鳥たちは次第に苦しそうに横たわっていき、わずか十二分で死んでしまいました。

放射線には、生物を殺す強い力があるのです。「これが放射能です」という解説者の声。小鳥は大量のガンマ線を浴びて、全身のDNAがずたずたに壊されて、死んでしまいました。これが放射線による外部被ばくです。

今、日本各地で発見されているセシウム137。これを稲に吸わせる実験も行われています。鉢植えの稲にセシウム137がそそがれると、三時間後には、稲の葉の先からも放射線が出てきます。葉も茎も穂も、さらに白米にも、まんべんなくセシウム137が溜まっていることがわかります。普通の田んぼの米も検査され、ストロンチウム90とセシウム137が白米から検出されています。

ウサギの肺に放射能を吸わせる実験では、喉から肺に入ったストロンチウム90が体内に溜まっていくことがわかります。「何しろ人間は、一日に約一万リットルというばく大な空気を吸うわけですから、肺から侵入する放射能の量も相当なものに違いありません」と解説されます。ハツカネズミに白血病やガンを作る実験も行われます。ストロンチウム89が、少しずつネズミの尻尾に注射され、しばらくしてから解剖すると、腫瘍ができています。「後脚の骨にたまったストロンチウム89から出る放射線で、その周囲の組織が病変した」と解説されます。

稲やウサギ、ハツカネズミのように放射能が体の中に入って、体の中から放射線に被ばくす

るのが内部被ばくです。体を一瞬で放射線が通りぬけてしまう外部被ばくと違って、内部被ばくは、「体の中に入ってしまった放射能から放射線を浴び続けることになるので、外部被ばくとは違った深刻な影響がある」とされています。

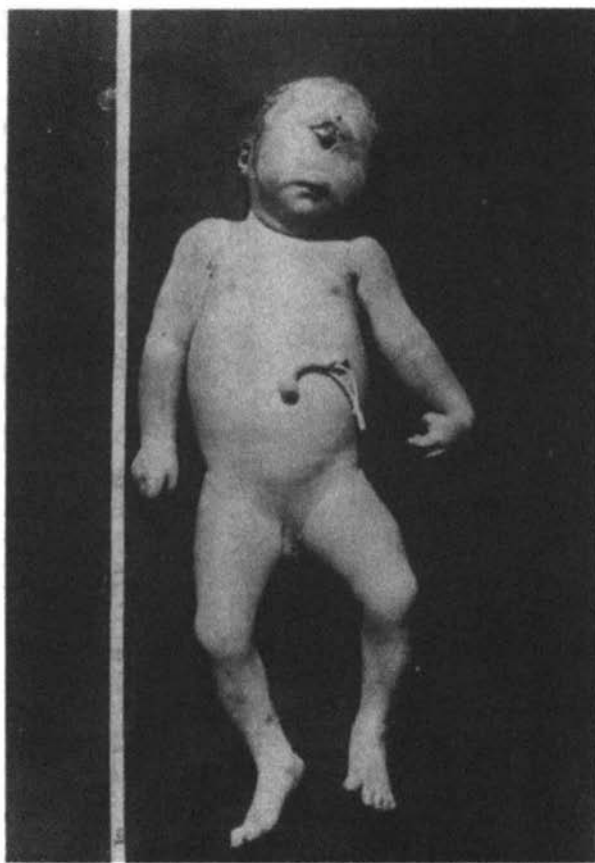
二週間で世代交代するシヨウジョウバエを使った遺伝の実験では、外部被ばくによって、性染色体に起こった突然変異によって、さまざまな奇形の子が生まれます。さらに、この突然変異が親から子へ、子から孫へと遺伝していくことも明らかにされており、このような突然変異を起こした遺伝子のことを「死の遺伝子」と呼んでいます。このことは、マラーという人が、一九二〇年代という早い時期に、同じようにシヨウジョウバエを使って、ごく微量の放射線によって遺伝子に致死的な突然変異が起こること、つまり「死の遺伝子」になることを証明し、後にノーベル賞を受賞しています。放射線は、微量でも危ない物なのです。

金魚の受精卵に放射線を当てた実験も行われますが、この実験は、ヒトでは胎内被ばくと同じ意味を持っており、孵化した金魚に、さまざまな奇形が見られます。

映画はこの後、広島・長崎の原爆後に生まれた奇形の赤ちゃんの話になります。そして、そこに登場したのが、一枚の写真です。

## 一枚の写真

先述した亀井文夫さんの岩波新書『たたかう映画』に、映画に登場した、単眼の赤ちゃんの



『世界は恐怖する』

写真が一枚載っています。映画ではこの写真について、「これは広島で、ある小児科の医者から手に入れた資料。単眼の男の子」「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませんから……。全くそう祈らずにはいられない気持ちです」との解説者の声が入っています。

この一枚の写真こそ、放射能の危険性そのものです。ショッキングな写真です。目に見えない放射能の怖さが、ひと目でわかります。



この一枚の写真を、映画の中に入れようとされた亀井さんの決断が、『たたかう映画』の中に書かれています。この国が福島原発の死の灰で汚染されてしまった今、私たちにとって非常に大切な意味を持っているので、少し長いのですが紹介します。

亀井さんは、金魚の受精卵の実験から、「広島・長崎の原爆によって、ヒトに同じようなことが起きたのではないか」と考えて、広島へ行っているいろいろと調べますが、それが、簡単にはわからなかったそうです。そこで、亀井さんは、次のような疑問を持ちます。

白血病やケロイドなどの原爆被害は、早くから世間に訴えられてきたにも関わらず、この奇形児の問題だけは、まるで『広島・長崎の秘密』でもあるかのように、世間の目から遠ざけられたのはなぜだろうか？

そこへ、以前、この奇形児の写真を提供してもらっていた広島のある医師から手紙が届きます。手紙には、「奇形児の写真が部外者に渡されたことが、ABCC（原爆障害調査委員会）や、その医師の病院で大騒ぎになって、自分のクビも、学問的生命も危うくなった」ということが書かれてあったそうです。

なぜ、ABCCや病院で大騒ぎになったのか。亀井さんは、「ABCCが、原爆と奇形児を結びつけられるのがひどく嫌なのかもしれない」と考えます。

問題になった写真について、ABCCは、「これは原爆とは関係ない。両親とも被爆していない」と断言していましたが、亀井さんは、その子どもの父親が「原爆直後に死体処理をやっていたので、

二次放射線障害を受けた可能性があり、多くの放射線を浴びていたに違いない」と考えます。

「二次放射線」というのは、原爆が爆発した瞬間に出た放射線ではなく、空中に舞い上がった放射能から出てくる放射線のことです。広島・長崎では、生き残った人びとが、そういう残留放射能によって内部被ばくをし、原発症を発症しています。

結局、その写真は医師に返されて、映画には使われなかったそうですが、亀井さんは、このことについて、次のように書いています。

「広島で十二年の間、奇形児の問題がなぜ世に出なかったかが、よくわかる。大概の場合、死産か、あるいは生まれ出ても数日足らずで死んだのが多いのだろう。また、人為的に処理したのも少なくないのだろう。これでは調査も統計もあつたものではない。つまり、こうした不幸な子どもたちが、闇から闇へ消えていったばかりでなく、「原爆と奇形児の関係」という学問的な問題までもが、うやむやになってしまったのである。（略）」

全世界の遺伝学者が、放射線の遺伝的影響は、どんなに少ない線量でも有害だと言っているときに、【広島・長崎の秘密】は、もはや秘密として葬り去るのではなく、今後、二、三世代を通じて研究調査を続け、貴重な人類の学問資料として、——すなわち、世界の人びとへの警告として、役立てる必要があるのではないだろうか。

このように考えた亀井さんは、「おそろおそろ【広島・長崎の秘密】のヴェールを取りのぞく決心」をします。「そうは決心したもの、広島・長崎の娘さんたちや、その親たちの気持

ちを思うと、ばくの気持ちも、やはり動揺しないわけにはいかなかった」と思いながら。

ところが、【秘密】は、奇形児の問題だけではなく、白血病にまつわる問題にも、【秘密】がまつわりついていたことがわかります。そして、亀井さんは、さまざまな疑問の中で、次のような発言があったことを紹介しています。

ある放射線医師は、「核実験をやめさせるために、放射能汚染の実態を公表するのはいいが、と言って、あまり放射能の障害面を強調すると、X線に対する恐怖から患者が減ると困る」と、自分の立場上の意見を漏らしていた。(略)

また、ある生化学者は、「政治的なにおいのする映画にならないようにしてほしい。アメリカへ行けなくなると困るからね」と、たいへん「政治的な含み」のある発言を漏らしていた。亀井さんは、「被爆国の科学者であっても、放射能汚染の問題でも、真実を語るということは、やはりなにがしかの勇気を必要とするのだろう」と考えます。そして、被爆国にある「事実を隠ぺいする忌むべき風潮」の中で、次のような決意をもって、映画を完成させます。

「死の灰(＝放射能)は、国境を越えてあらゆる土地にふりそそぎ、人類すべてを揺り動かす恐怖である。こういう世界的な問題と取り組むためには、国境を越えた人道主義、ヒューマニズムを持つことが第一だ。おそらく原水爆禁止という問題は、現代における政治の盲点であろう。そのときの総理大臣、岸信介だつて、放射能が恐ろしいということは知っている。

だが、現在、自分の生活に直接の被害はない。未来の恐怖である。すぐに政治の利害に結び付かない一〇〇年先の破局である。そこで、口には「原水爆反対」を言いながら、つついゴルフに熱中してしまう、というのが現実だ。

ほくは、改めて考える。この危機を未然に防ぐためには、政治だけに頼っていても防ぎきれない。ほくたち、世界の民衆が、事実をはつきり知り、人間的自覚に戻って、お互いに協力しなければ恐怖はいつになっても去らない。それもぐずぐずしていたのでは取りかえしのつかぬことになる。芸術とか、文化とか、政治とかいうよりも先に、今日の人類が第一に処理しなければならぬ問題なのだ。いくら何を論じても、この問題を放置しておいたら、一切が破滅してしまう。そのためには事実を知ることが恐ろしいとか、悲惨な話は聞きたくないなどと、消極的なことを言っていずに、好むと好まざるとにかかわらず、ほくたち一人ひとりが、この恐怖すべき死の灰の実態を科学的に見極めなければならない。理屈として知るのではなく、実感として受け取らなければならない。そのショックから自らの人間的自覚をよびさまし、どうして防ぐかを考えなければならない。」

ここに書かれてあるように、この一枚の写真は、「恐怖すべき死の灰の実態を、理屈として知るのではなく、実感として受け取らなければならない。そのショックから自らの人間的自覚を呼び覚まし、（放射能災害を）どうして防ぐかを考える」ために、使われたのです。

しかし、亀井さんの「決断」は、原発推進へまっしぐらに向かっていった日本の中で、いつ

の間にか、かき消されるように忘れ去られてしまっていました。

## 外国では、「現実」が報道される

映画「世界は恐怖する」が作られてから、今年で五四年目。福島原発爆発後の七月に、自由報道協会のフリージャーナリストである上杉隆さんが、日本という国が世界の中で非常に特殊な国であるとして、『報道災害【原発編】——事実を伝えないメディアの大罪』（鳥賀陽弘道さんとの共著、幻冬舎）に、次のように書いています。

海外のメディアは、チェルノブイリ事故二五周年の記事を載せていました。（略）

奇形の子どもとか、小頭症の子どもとか、そういう写真がいっぱい出てくる。今なお苦しんでいるってことを知らせるために載せるんです。写真がすさまじいんですよ。CNNでもずっとやっています。海外だと、そういう「現実」を普通にみんな流しています。そこで、小さいころからそういう現実を見ていると、やっぱり「放射能は怖いものだ」という意識が芽生えるんです。（略）

ところが日本は、放射能事故、放射能による奇形の映像を、テレビ・新聞は映さないんですよね。（略）

「広島・長崎」も、TVではダメなんです。写真を出すのもダメ。なぜかというところ「悲惨

過ぎる」という理由です。それは、本当は嘘なんですよ。「放射能が危ない」というのを見せたくないからなんです。

私は、上杉さんの本を読むまで、「放射能による奇形の映像は、悲惨だから報道されないもの」とばかり思い込んでいました。しかし、外国では、そうではなかった。放射能被害の「現実」として普通に報道されていたのです。日本の報道の仕方が、他の国と、こんなにも違っていたとは。『報道災害』を読むと、「原発安全神話も、報道がばらまいていたデマだった、そのことが福島原発爆発ですっかりばれてしまった。報道は政府の批判をしないで、政府の広報をしていた」ということが、よくわかります。「事実を隠ぺいする忌むべき風潮」を作ったのは、実は、原発推進をともに批判することができなかった、報道機関だったのです。

日本では、「恐怖すべき死の灰の実態」である悲惨な映像が、すべて隠されてしまったために、放射能の恐ろしさを「理屈ではなく実感として受けとること」ができていなかった。しかも、そういう映像は、「悲惨だから」隠されたのではなく、被爆国が原発を推進するために、「放射能が危ないことを実感させないために」隠されてしまっていたのだということです。私は、見事にだまされていました。

亀井さんと上杉さんの指摘から、私は、「一枚の写真」のような奇形児の写真が、国民の目からすっきり隠されてしまったことが、実は、被爆国が福島原発爆発事故を起こしてしまった理由の一つではないか、と考えたのです。放射能が恐ろしいものだということを、理屈ではな

く体で実感できていたら、被爆国が原発大国になり、安全神話に騙されて福島原発爆発を起こすことはなかったのではないかと。

ここに「一枚の写真」を載せたのは、亀井さんが「世界は恐怖する」という映画を作られた「決意」に学んで、「恐怖すべき死の灰の実態」を伝えたいと思ったからです。「写真の赤ちゃんが、一つしかない目で強く訴えているのは、そのことに違いない」と思うからです。「このことで多くの非難を受ける恐れがあるとしても、『福島原発で汚染された国で、今、直視しなければならぬ事実だ』ということは、多くの方の共感を受けるのではないか」とも思いながら。

## チエルノブイリ事故の先天障害と福島原発事故

今年は、一九八六年に起きたチエルノブイリ原発事故から二五周年目にあたります。

四月にベルリンで国際会議が開かれ、その現状が報告されています。内容は、国際機関や日本政府が認めているような「チエルノブイリ事故の健康被害は、小児甲状腺ガンだけである」ということが嘘っぱちであり、汚染地に暮らしている人びとに起きている、健康被害の悲惨な実態に言葉を失います。

松井英介医師（岐阜環境医学研究所。「見えない恐怖——放射線内部被曝」の著者）は、東京で十月に開催された「市民・科学者国際会議」で、「低線量内部被ばくによる健康障害」という題で講演され、「福島の子どもたちに、これから起きるかもしれない健康障害」について、

チェルノブイリで起きている健康被害と重ねて、次のように言っています。

「高度汚染地域で生きて産まれた新生児一〇〇〇人の中に、事故の前には四・〇八人だった先天障害が、事故後の一九八七年から八八年には七・八二人と、倍近くに増えています。また、低度汚染地域においても、少し遅れて、事故前には四・三六人だったものが、一九九〇年から二〇〇四年には八・〇〇人に増加しています。ともに統計学的には有意です。」

特に高度汚染地域のデータは、福島県郡山市の七つの学校の子どもたちが今後背負うであろう健康障害を予想するうえで、きわめて重要なものと評価しなければなりません。さらに低濃度汚染地域のデータは、郡山市のより低濃度地域においても、先天障害の増加を予測させるという意味で、きわめて重要です。」

この「郡山市の七つの学校の子どもたち」というのは、郡山市に対して、学校ごとの集団疎開を求めている七つの小中学校の十四人の子どもたちのことです。「郡山市に暮らすことで、一年一ミリシーベルトを超える外部被ばくをするから」というのが理由で、六月二四日に提訴されました。松井医師は、この講演会の資料と著書「見えない恐怖——放射線内部被曝」に、ベラルーシで生まれた、脚や、腕や、胴体に、先天障害を背負った子どもたちの姿を掲載しています。

松井医師のこの行動は、「事実を隠ぺいする忌むべき風潮」への、大きな風穴になるのではないのでしょうか。

放射能の被害を最も強く受けるのは、細胞分裂のさかんな胎児や子どもです。放射能災害は、赤ちゃんや幼児、まだ大人になりきっていない子どもたち、これから生まれてくる子どもたち



に降りかかる、取り返しのない災厄なのです。このことが明らかにされたのは、レントゲンがX線を発見してから十年ほど後のことでした。広島・長崎原爆投下から逆算すると、ほぼ四〇年も前の一九〇六年のことです。放射線科学では、「ベルゴニエ・トリボンドウの法則」とされています。また、一九二〇年代には、マラーの放射線によって遺伝子が突然変異するという発見もあります。つまり、原爆であれ、原発であれ、核分裂の技術を社会の中に持ち込んだ科学者たちには、放射線に被ばくすることの意味が十分にわかっていたということです。戦争という愚かな行為が招いてしまった原爆と、そこから派生した原発がもたらす死の灰が、人類すべてに関係する恐怖であることを知るとき、「まだ間に合うのだろうか」という思いに駆られて、暗澹たる気持ちになってしまいます。

いま、世界には、放射能で汚染されたすべての地に、子どもたちの「悲惨な姿」があります。日本で、例外的にそういう姿を報道しているカメラマンの森住卓<sup>たくし</sup>さんは、「核に蝕まれる地球」の中に、目を覆うばかりの子どもたちの写真を載せています。その中の、イラクで劣化ウラン弾が原因で産まれた悲しいまでの赤ちゃんの写真には、森住さんに伝えられた、次のような医師の言葉が添えられています。

「この子は助からない。あなたが写真を撮って世界に被害を知らせてくれることで、この子がこの世に生まれた意味があるのよ」

私たちは、悲惨な赤ちゃんが「自分の子であり、孫であり、ひ孫であり、……」と想像でき

るでしょうか。そこから、「二度と福島原発のような惨事を起こさないためには、核兵器も、原発も、全廃しなければならない」と決断をすることができるとでしょうか。そして、間に葬り去られた何万、何十万の無残な子どもたちに、「あなたが生まれてきた意味がある」と伝えることができるでしょうか。

## 守りたいのは、ヒトではなく原子力産業

もう一つ、隠され続けていることがあります。

それは、国際放射線防護委員会（ICRP）や国連科学委員会、国際原子力機関などの、「国際機関」という権威の衣をまとった組織が、アメリカを頂点とする世界の原子力政策のために作られたものだということです。ということは、彼らは、原発やプルトニウム工場や再処理工場やウラン採掘場などの原子力産業のために働いているということです。彼らが出している放射線の基準は、原子力産業が存続するために都合のよい基準であって、ヒトを守るための基準ではないということです。ですから、国際放射線防護委員会は、こういうふうに言っています。

「みなさんは、原子力を利用して、便利で快適な生活をして得をしている。だから、放射能によって何らかの被害を受けることは我慢しなさい」と。

「一年に一ミリシーベルト」という基準は、「一般公衆」の基準です。子どもの基準は、あり

ません。放射線の危険性は、胎児は大人の100倍、子どもは10倍といわれます。そういう子どものための基準がないのは、そういう基準では、原子力産業はまったく動かすことができませんからです。

その上、「二年一ミリシーベルト」の基準は、外部被ばくだけです。内部被ばくは無視されています。国際機関が、チェルノブイリで、「放射線が原因だ」と認めている影響は、小児甲状腺がんだけです。これ以外のさまざまな病気や障害の増加は、全く認めていません。「チェルノブイリ事故での大きな問題は、放射能を怖がる精神的ストレスである」としています。「外部被ばく線量だけの少ない被ばく線量では、放射線による障害が起こるはずはない」というのです。

汚染地で暮らす人びとが内部被ばくしているのは当然ですが、そのことは全く認めていないのです。こういう考え方は、日本政府が、内部被ばくによって原爆症を発症した原爆被爆者を認定しなかったのと、全く同じです。

「福島原発事故によって国が行なっている政策では、子どもを守ることができない」と、今、汚染された地域に暮らすことを余儀なくされている人びとが不満に思い、憤っています。それは仕方のないことなのです。日本が原発を選択した時から、政府はずっと、「ヒトを守らない、子どもの基準のない国際基準」で原発を動かし続けてきたのですから。

「微量な放射能は、体には影響がない。原発や再処理工場から出てくる放射能は、空や海で薄まるから、何の問題もない」と言ってきたのです。しかも、現在の国会は、政権与党にも、勢力のある野党にも、原発を止める考えはまったくありません。原発の輸出さえ、熱心にもく

ろんでいます。福島原発事故後も、「原発を持っていることで、核兵器を作る能力が維持できる、核抑止力は国の防衛にとって必要である」と公言している人びとも大勢います。

政府が、そのために不利になるような放射線防護対策をとるはずがありません。

## 「体の中にセシウム137があることは異常なことです」

ヒトを守らない国際放射線防護委員会ですが、「低線量でも放射能は健康に害がある」ことは知っているのです。それが「一年一ミリシーベルト」の基準に現れているのでしょう。しかし、現在の日本政府は、その二〇倍の二〇ミリシーベルトを、「安全」基準値にしています。福島原発の事故まで法律で決めていた「一ミリシーベルト」の基準は完全に無視し、二〇倍にして、それでも「安全」だと言っています。これでは法治国家ではなく、国民放置国家です。

また、汚染地でとれた主食のお米も、セシウム137が五〇〇ベクレル以下は「安全」だとして流通させています。チェルノブイリ事故で汚染されたベラルーシでは、主食となるパンのセシウム137の基準は、四〇ベクレル以下ですから、お米の十二分の一以下です。こういう基準も、これまで見てきた「からくり」からすると、当然のことになります。つまり、守ろうとしているのは、国民ではなく、事故を起こし放射能で大地を汚した東京電力なのです。

チェルノブイリで大量のセシウム137で汚染されたベラルーシで、バンダジェフスキーという医師が、十年ほど前に「セシウム137による内臓の病変と対策」という報告書を出して

います。汚染地で亡くなった大人と子どもを解剖して、「心臓、脳、肝臓、甲状腺、腎臓、骨格筋、小腸などのあらゆる臓器にセシウム137が溜まっており、子どもは大人の二倍以上もあり、溜まった量と亡くなった病気の間には関連があった」としています。

福島原発爆発によって、セシウム137は日本全国に降ってきました。濃淡の違いはあっても、厳密には、汚染しなかった土地は、日本中、どこにもありません。そんな日本の中で、子どもたちを育てていくことがどんなに大変なことか、想像を絶します。しかし、可能な限り子どもたちを、特に内部被ばくから守るために、まず、放射線をしっかりと測定して、「現実」を知ることから始めるしかありません。国際機関とは独立した、信頼できる科学者らが主張しているように、子どもを守るためには一年〇・一ミリシーベルトを基準にして、「そこで暮らし続けるか」、「疎開するか」を選択することも必要ではないでしょうか。

ベラルーシの政府とは独立した、放射能安全研究所の副所長である、ウラジーミル・バベンコさんは、著書『自分と子どもを放射能から守るには』（世界文化社発行）で、次のような指標を提唱しています。どうか覚えておいてください。

「大人、子どもに関係なく、体重一キログラムあたりゼロベクレルが望ましい」

「体内放射能を測定して、結果がゼロでなかったら、どんな値でも異常だと思ってください」

2011年11月10日

（PKO法「雑則」を広める会）所属・千葉県市川市在住

# 〈PKO法「雑則」を広める会〉で発行している 小冊子をご紹介します。

『未来に続くいのちのために 原発はいらない』この冊子は、原発の実態がよくわかり、原発は廃炉にするしかないことが納得できます。

私はこの冊子をまとめて購入し、脱原発デモや経産省前での座り込みには、必ず持参しています。その際、「読み終わったら、原発に無関心の人に必ず手渡してください。真実を広めていきましょう」と、ひと言添えることにしています。

(あごら会員・綿津靖子)

●『未来に続くいのちのために 原発はいらない』(第1号・第3号、参考資料)  
冊子をご希望の方は、ご連絡ください。 一冊 100円(送料別)

〈PKO「雑則」を広める会

東京都武蔵野市境2・11・4

TEL・FAX 0422・51・7602 佐藤

TEL・FAX 047・395・9727 小田

自費出版、『死にいたる虚構』『放射線の衝撃』もあります。



## — 絶望を希望に変えるために

チェルノブイリ原発事故によるアメリカでの乳がんの死に上回っている衝撃的な事実がはじまる『死にたいという虚構』の序言は、「ユ・ロバート」で、政府が子どもたちを空気で窒息にしている事実を白日の下にさらす今、我々にも絶望的です。しかし、著者は語っています。「彼らは世界の中で、いままで通りきれいな空気を吸って、放射能汚染の少ない食物を食べることができている」（原子力力の源）を何とかが選んでいることに注目すべきであるとい

著者の言う「原子力の悪徳」を避けてきた地域とは、原子炉がなく、乳幼児死亡率が非常に低い地域のことです。ここに絶望を希望に変える方向がはっきり示されています。原子炉をなくし、原子力の利用を止めることで、子どもたちを救うことができるという希望です。その希望を実現するために、行動する時、本書が大きな支えとなることを確信しています。

すべては、一人ひとりから始まります。

PKO法「鑑別」を広める会

「PKO法「韓割」を広める会」のこと

1992年、自衛隊の海外派遣とよなP・Kの間に危機意識を醸成したとされたが、この「パブリック・P・Kの海外派遣」は、本書出版前に、全国の主要な人々へと『緊急事態「特別」民衆の協力方』について毎日新聞の全国版（1992・9・28）に「これについて詳しくは述べています」の意見広告を掲載、反政府論者「アヒナ」に発行、琉球・読者大賞受賞後に「緊急と原稿」。「『日本国憲法へのおかしな』、子どもたちでも又文で文がなされた。2008年1月6日に「『読む』にたまる」と「放散館」の自衛隊出版、2010年7月1日に「来航へ続く」のちのちに「原稿はならぬ」のちのちに「2011年6月8日に発行第2巻「『日本国憲法へのおかしな』原稿はならぬ」のちのちに「2011年7月1日に発行第2巻」。

◎ 參考資料

アヒンサー 死にいたる虚構 ―国家による低線量放射線の誘惑―

原糖と原糖は同じです

2005年8月5日 星期五 第11版

2013年7月20日 08:11:00 星期一

印刷 校通印刷 / 東京都台東区荒川区2-6-11

31

100% (100%)

10

## 広島と長崎の原子爆弾について

・ 原子爆弾(原爆)とは、

原爆は、放射性元素であるウランやプルトニウムの原子核を分裂させ、そのときに生じる中性子を利用して、連鎖的に大きな爆発をもたらしつつ行われる。原爆は、爆発した時に放出される熱や、衝撃波などによって、都市をもろもろ一瞬に破壊し土を、生き残った人も放射能によって健康と土地の汚染によって、生産能力を失うなどの、放射性物質の威力に及ぼされます。さらに、放射能によって遺伝子が破壊されたこと、生物界に何世代にもわたってのつた影響が考えられます。原爆は、放射能の威力などとは異なる力をもった破壊者です。

原爆は、第二次世界大戦中に米・独・日が製造を目指し、アメリカが1945年8月6日に広島、9日に長崎に投下した。1897年8月からの日清戦争、台湾併合、日露戦争、朝鮮併合、日中戦争、太平洋戦争など50年に及ぶ日本の侵略・戦争の時代は、8月15日に敗戦を迎えて終わりました。しかし、同時に世界は「核の時代」へと突き進んで行きました。

広島のワラン原爆：広島市内の約600m上空で爆発したとされています。爆弾に搭載されていた60kgのワランのうち、約700gが100万分の1秒という短間に核分裂連鎖を起こして、放射能が爆心一帯に広がりました。爆弾の内部が250万度という高温になると大爆発して大気柱となりました。それは、大気が突然、火の雨に現れたのと同じでした。

爆発から0.315秒に、表面温度が2000度（太陽の表面温度は約6000度）にもなり、そこから変化した超高温の熱線は、地上に大火災をもたらしました。その1.7秒後に、キノコ雲ができました。



年ノコギリは火球に含まれていた核分裂生成物（＝死の灰）、放射線照射された爆弾の燃料物質と大気中の原子核。

1945年8月6日、広島（右下）に投下された、爆心地点の約10kmの範囲内上空からアメリカ軍機撮影。（出典：『広島・長崎原爆実況』）



### — 參考資料

アビシニヤ

死にいたる虚構 ―国家による情報開放政策の隠蔽―

原爆と原発は同じです。

2011年3月11日  
東日本大震災・原発震災発生  
東電福島原発爆発

政府による「子殺し」？ ②

4月19日、文部科学省が福島県の子供の年間被ばく量の暫定基準を、100マイクロシーベルトと定めて発表。多くの学校が放射線計測を始めています。1マイクロシーベルトというのは、厚生省が1998年に100マイクロシーベルトに相当する被ばく量を、1時間では0.5マイクロシーベルト以上による悪影響のない「放射管理目標値」では、健康上の重大な影響を及ぼさない、3.3mSvの概念と定めています。その量の0.5倍と相当します。100マイクロシーベルトは、政府の目標値を7割を下回らない、と見なされます。しかも5月22日、文部科学省は100マイクロシーベルトの基準は厳しすぎない、歩行距離は多い1マイクロシーベルトを指標とするとした、など、基準を定めないのがよいと質疑に「基準を1マイクロベルトに下げると、福島県で義務教育がとれない」（17日6時頃）と、批判に対しては「1マイクロシーベルトに下す」（24日20時）とします。政府の対応はしりぞいています。

★『死にいたる道標』と 参考資料 については  
0422-51-7602 (特選) または041-385-9129 (一般)

れ分裂のウラン（ $^{235}\text{U}$ ）。放射性の微粒子となった上で建築地、製造によ  
て蒸発した人体などありとあらゆるものを含んで上昇していきまう。

相変遷の過程によって雲気が凝結されると、数十分間かけて気体によって衝突が發生し、10秒後には直径を越える雲粒となり、この過程から7分後、304℃時には10 $\mu$ mにて達した。高湿の環境で雲の気圧力差から発生した衝突の過程は10 $\mu$ m地点で秒速29m (104km/h) (2.3k)と、2.3k地点でも29mに達した。キノコ雲は130分後に高度より2000mに達し、1時間弱には高湿、干ばつとも一致した状態に達しています。火球の落下は目撃者です。キノコ雲は散逸し、放射状塵埃は一面とともに放射状降下層（マウラークラウド）となって降り、赤外線によって放射線となった空になった。したがって、

広島原爆の出力は、通常のTNT（トリニトロトウエーソ）火薬に換算して、約15～16ktと推定され、4千機の爆撃機から一度に落とされた爆弾の量に匹敵するとされています。

長崎のブルトニウム爆弾：搭載されているkgのブルトニウムのうち、約1kgが核分裂（未分裂2kg）して核爆発が起こったとされています。長崎市内の約500mで爆発し、その状況は広島原爆とほとんど同じです。長崎原爆の出力は、TNT火薬に換算して約20ktと推定されています。

1945年8月9日、長崎（原子爆弾）

## 原爆被爆者とは

原簿による死者は、広島・長崎在住の人々のうち約4分の1に当たる21万人以上(広島が11万人・1万人、長崎が7万人・1万人)の人々が即死したとされており(1977年、出陣年1945年末までに生き残っていた乗艦者は、出る可能性が全くなかったため「即死者」として扱ふことになりました)。



あぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐら

「原発反対」の思いによせて

が今、「世界一、危険な場所の上にある」とか、「五年、十年の間に」とか、意見があります。

「原発が危険だ」という認識は、浜岡に原発が建設されるという時からありましたし、建設反対運動などにも参加していました。

しかし、その中心としてではなく、

会員として、会費やカンパを払い、身近な人の署名を集め、時に集会などに参加する程度で、送られてくるニュースや資料もあとで読もうと、そのままになったりして、何十年か経ってしまいました。

今年、福島原発の事故を受けて、その恐ろしさに改めてびっくりしています。

浜岡原発建設当時、「あそこは、しっかりした岩盤になっているから」と言われていたのを思い出します。それ

「原発は危険だ」と、ずっと警鐘を鳴らし続けていた学者たちの声は、政府やマスコミが全く取りあげずにきたということも、最近のいろいろな学習会に参加する中で知りました。

七月には、静岡で原発に反対する大きな集会在、二つ開かれました。

いろいろな市民グループや立場の人們が、それぞれにあちこちで集会を開くのも大切だと思います。でも、できれば「原発に反対する」という一点で、政党やイデオロギーの違いを越えて、みんなが大きくまとまれば、それは、さらに大きな力の輪になるのではないでしょう。

「原発反対」といっても、「即、停止」

とか、「五年、十年の間に」とか、意見があります。

それはそれとして、各団体が活動すればよいことで、「人類、いや地球上のすべての生物にとつて害があり、未だ科学の力では制御できない物質だ」という認識だけでも、一致できるのではないかと思うのです。一般市民の人として、それぞれの団体のリーダーたちが、そのことを話し合つて、行動を提起してくれたら、と願っています。

(2011年8月) (静岡・栗山満子)

✱

「今夜は豚肉料理でも」と、手にしたひき肉に「国産」の表示。ハテ、どこ産かと尋ねたら、「各地から集まってきたものなので、わかりません」と、返事。チラッと不安がよぎる。野菜にして

もそうだ。産地のチェックには手間も時間もかかる。買物をしての帰り道、決まっていた息が出て、ただひたすら、虚しい。

築数十年の我が家は、地震で屋根がやられ、順番待ちの末、ようやく修理となった。業者のひとりが雨どいの上部をつくと、溜まっていた汚泥らしきものが、ドドドッと地面に落ちた。

それから間もなく、近隣一帯の側溝や雨どいなどで、高い放射線量が計測されたと、週刊誌などが大々的に報じ、屋根の一件を思い出してソツとした。

福島第一原発から約二〇〇キロ離れた千葉県の一角にある私の住む市は、ホットスポットとなった。関東圏に住んでいる者さえ、うろたえている。

福島で暮らしている人びとを思うと、ワーツと叫びそうになってしまう。福島に留まるひと。こどものために故郷を

離れるひと。どちらも大変な決心に違いない。一人ひとりがかかえる事情は、さまざま。飛び交う情報もまたさまざま。

気の遠くなるような除染作業。低線量内部被曝の脅威、疎開裁判、生活の糧の確保。どれもこれも待ったなしだ。国や福島県、そして東京電力は、「都合な真実」を隠蔽せず、困難な道筋でも、正直に開示してほしい。そうしてやっと、取るべき方向性は、見えてくる。

原発の是非を、有権者が決める「原発国民投票」実現のための署名運動が始まった。  
(千葉・綿津靖子)

### 【編集後記】

◆「あごろ」の裏表紙の近刊シリーズ「六〇代は女ざかり」を何度か見ているうちに、気がついたことがある。大学の恩師・故内山尚三先生の奥さまで、社会学者・故鶴見和子さんの妹さんで

ある内山章子さんに「六〇代が一番勉強できる時よ」と、いくども励ましていただいたことを思い出した。

私は今、六八歳になったところ。六〇代は、あと二年しかない。出遅れかもしれない。でも「六〇代」とこだわらずに、自分の生き方、老い方を真剣に考えて、自分で決めたいと思う。「生まれてきてよかった。生きてきてよかった。いい生涯だった」と思えるように、言えるように、自分に言い聞かせて、私の老後を勉強していこうと思ひ、この機会を内山章子さんと（あごろ）に、心から感謝しています。（柳澤つや子）

◆一見、書きにくいかと思われたこのテーマ、熱のこもった原稿が集まりました。「日本の危機、世界の危機」が感じられる今、それぞれの描く「六〇代」をスプリングボードにしませんか？

(千)

## 〈あごろ〉は、人と人が出会うひろば――

思い悩んだとき、もっと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……心おきなく話し合える仲間がいる。――そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌「あごろ」を軸に、よりよい自分と社会を目指すゆるやかな連帯。どの部門にも「長」は置かず、自分を変え、社会を変える――

「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

ハガキ・FAX・メール・電話でお申し込みください。

## 〈BOC〉のご登録もどうぞ……

一九六〇年に生まれた〈BOCバンク・オブ・クリエイティビティ〉は、〈創造力の銀行〉。あなたの創造力や特技、希望の報酬をご登録ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな〈創造力〉でも歓迎！ ただし、半年以上〈あごろ〉会員の方に限ります。

### 連絡先

〒160-0022 東京都新宿区新宿一-九-四 中公ビル  
電話 03-3354-3941 (代表) FAX 03-3354-9014  
Eメール XLV05467@nifty.com #たぢboc@mb.infoweb.ne.jp  
ホームページ <http://homepage2.nifty.com/agora1/>

---

あごろ 331号 60代は女ざかり

●編集 あごろ新宿 ●発行 2011年11月20日 ●印刷 藤田印刷(株)

●発行所 BOC出版部 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル10F

●TEL 03-3354-3941(代) ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@nifty.com

●定価 本体1,000円＋税 ●振替 00100-0-5264 BOCあごろ編集部

---



9784893061881



1920036010004

ISBN978-4-89306-188-1

C0036 ¥1000E

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体1,000円+税

## 平和と平等を追求する 『あごら』近刊シリーズ

「女の年金」を考える

子どもの生存権

活躍する女性たち

企画・編集・翻訳…

何でもご相談ください

創業1960年 —

女性専門職集団

**BOC**



各種プランニング

各種調査

取材・撮影・編集

校正・デザイン・レイアウト

各国語翻訳その他



男女共同参画の

BOCシニアも

スタートしました。

ベテランの知恵と経験を

お役立てください。

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

☎03-3354・3941 FAX3354・9014

E-mail XLV05467@nifty.com

サイレントマイノリティの**BOC**出版